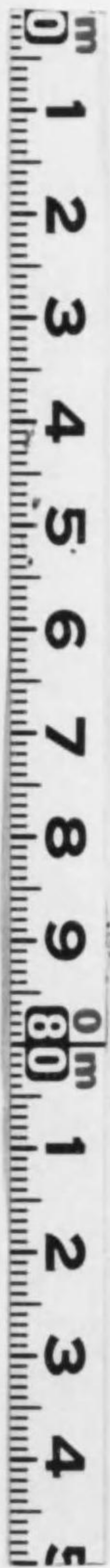


特257

313

明日の醫術 第三篇上



始



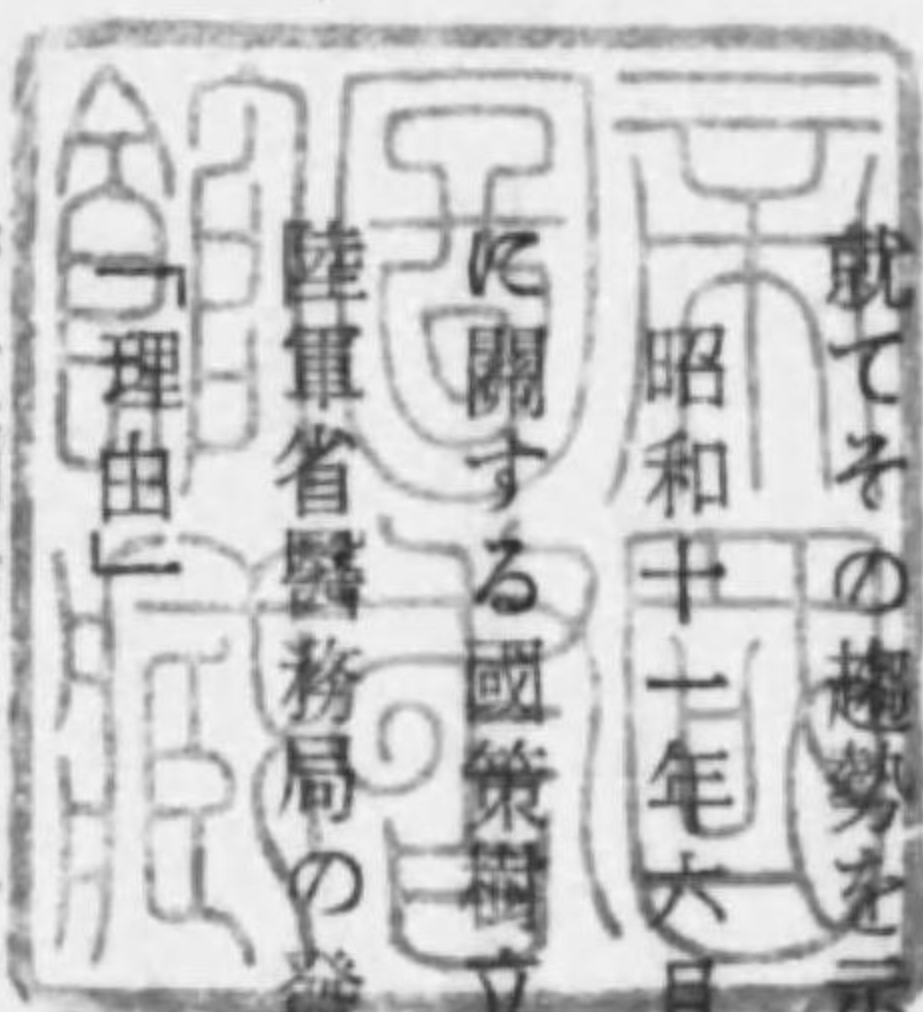
特 257  
313

「明日の醫術」

國民体位低下の問題

人口問題に關聯して切離す事の出来ない重要問題として國民体位低下問題がある。之に就てその趨勢を示してみよう。

昭和十一年六月、當時の陸軍大臣寺内大將が國民体位低下の問題に對し、國民保健衛生に關する國策樹立を進言された結果つひに厚生省設置といふ事になつたのであるが、陸軍省醫務局の發表せる理由及び對策は左の通りであつた。



一、歐洲諸國に於ては大戦後著しく國民の体格が低下を來したので、これが對策樹立の爲いづれも保健省若しくは衛生省を設置し、銳意國民保健の向上につとめた結果今や國民の體質体格は著しく向上し、往年の如き好調を回復してゐる。

一、陸軍省徴兵検査の成績によれば大正十一年より同十五年にわたる検査不合格者（丙、丁

種)は千人につき二百五十人内外であつたが、昭和二年より同七年では右の比率が三百五十人となり、同十年では、四百人に激増し國民の體質の低下を如實に物語つてゐる。

一 國民の平均身長は大正元年の五尺二寸に比して昭和十年は五尺二寸九分となり、九分の増加を示してゐるが、体重之に伴はず大正元年の十三貫八百匁に比して昭和十年は僅かに十四貫百匁に止まり、統計によれば過去二十五ヶ年間の体重増加平均は僅かに二百七拾匁に過ぎない。

- 一 結核性胸部疾患が著増してゐる。即ち明治二十四五年頃の壯丁は、百人につき二人の結核患者を出したが、今日では二十四人である。
- 一 醫術の進歩醫療の普及等は、結核による死亡率の低下に、ある程度の効果を示したが、結核の發生防止に對しては、全然無力なる所以を實證した。
- 一 チブス、赤痢以下法定傳染病は逐年増加の一途にある。
- 一 體質体格低下の原因は、体育の不備、榮養醫療の不足にあらず、根本的に母体の劣弱化

に胚胎せる事實

- 一 現在の衛生行政は、單に藥物飲食物の取締汚物塵埃處理、健康保健制度その他に止り全體として無力無統制である。
  - 一 現在の保健衛生を管掌する文部、内務、遞信、商工、の各省間には有機的綜合性を缺如してゐる。地方もまた同じ。
  - 一 以上の如き理由に基き、政府は各省の割據的舊套を打破し、新に保健衛生を管掌する一省を設け、これに關する現在の省部局課を綜合し、労働保健、防疫、醫療、体育等の事務を統制し、衛生行政本然の使命を達成すべきである。
- 管掌事項
- 一 人口食料問題と生活資源の分布調整
  - 一 移植民に關する人的事項
  - 一 國民の勤勞能率及び持久性増進

- 一 國民生活必需條件に關するもの
  - 一 被服、居住の合理化統制
  - 一 還境への服合に關するもの
  - 一 心身の鍛練、能率増進、防空防毒、防疫に關する衛生教育
  - 一 社會衛生事業の指導監督
  - 一 病院醫師等人的資源の統制運用
  - 一 生活科學研究機關の指導監督（内務省の衛生研究所、營養研究所、文部省の体育研究所等を廢合し、更に保健衛生に關する研究機關を加へて、生活科學研究機關とする。
- さてこれらの不合格者の主なるものは筋骨薄弱であるが、この筋骨薄弱者の數は昭和七年には壯丁の三割一分七厘、同八年には三割二分七厘、同九年には三割三分七厘といふ具合に毎年〇、一割の率で増加しつつある。

次に、この筋骨薄弱に續く不合格者は、結核性疾患や視力障礙や外傷性不具や短尺等が之に續いてゐる。花柳病は田舎よりも都會に多く、中でも下層階級の勞働者や職工、運轉手等に多い。そして地方壯丁にてこれに罹病してゐるものは都會へ出稼ぎに出てゐたものが、大半を占めてゐる。

次に、身長体重の關係をみると、過去廿五ヶ年間に身長は約一寸、体重は一百六十匁の増加を見てゐるが、大正元年當時の身長一寸に對する体重は二百六十匁であるから恰も大正元年當時の体格を以て、身長が延びたに過ぎない事になり、身長体重の關係―比重は低下してゐる事になる、これを同様の現象は胸圍に就ても認められ、過去二拾年間といふもの殆んど變化を見ないのである。而も日本人の胸廓は左右徑が長くて、前後徑が短いといふ特徴を有し、歐米支人の左右徑短く前後徑長いのに較べて、胸圍は同一であつてもその内容の劣つてゐる事を認めなければならぬのである。

ここに注目すべきは、体重の増減といつても体重が全身平等に増減する型と、身体の一部は肥大する代りに、他の部が瘦る型と二通りあるのであつて、我國の壯丁には此後者の

型が多いといふ現象である。

これは我國の各種の生活様式、生活設備等に於て、大缺陷のある事を證明する所であつて國民全体がこの生活様式、設備の中に於て各々自發的にこの缺陷を克服するだけの意識を持つべきであると共に、この缺陷の改革から始めることが、國民体位低下の眞因を根絶することになるのである。軍隊生活に依つて發達した壯丁の身体が除隊後一年乃至は二年の歸休生活に於て、入營前の身体に逆戻りしつ々ある現象一殊にそれが農民や工業労働者に於て顯著なるをみる時愈々この感を深くせざるを得ないのである。

さて、次に壯丁に與へる都會と田舎の生活の影響についてみよう。昭和十一年度の受験壯丁六十餘万人に就て調べてみると、都會に生れ都會に育つた者は、不合格者が壯丁千人に付き四百十人であるに比較して田舎に生れて田舎に育つた者は、不合格者が壯丁千人に付き三百十餘人で田舎の方が不合格者は約百人少い事になる。然るに田舎に生れて田舎の小學校卒業後都會に移住した者の不合格者は千人につき三百八十餘人となつて都會生活が

如何に國民の体位に悪影響を與へるかを如實に物語るものである。

所が都會に生れ、都會の小學校を卒業した者はその後田舎に移住しても依然千人中四百五拾餘人の不合格者を算してゐるから如何に幼少年時代の都會生活が、人々の体格不良の原因として決定的であるかを知り得るのである。

かくの如く田舎は都會に比較して良好である事が分るが、この田舎生活も亦現在のままに放置すべからざる事は、田舎では十餘年前は千人中の不合格者が二百餘人であつたのだから、現在に於ては三百人を超えるに至つてゐるのを見る時、痛感させられる譯である。

次に、學生の体位はどうであらうか。

我國の壯丁検査に現はれた國民の健康体位の現状と、都市と田舎の比較は右の如くであるが、之を今職業別に眺めてみよう。

不合格者を職業別に見る時その筆頭は學生であつてその不合格率は、千人につき五百數十人といふ、實に半數を超える不成績振りである。特に東京府と大阪府の如きは六百人に

垂んとしてゐるのには驚かされる。東京と大阪の學生の体位、健康の低率振りを證明するものとして、次の様を一例證が擧げられる。即ち東京市に於ける某中學校五年の生徒中所謂健康生徒として、近衛師團に營内宿泊したものの九十八名につき、健康診斷を行つた結果は、九十八名中三十九名といふ實に四割が慢性の胸部疾患を持つてゐたといふのである。

右の例證は實に學校當局、軍當局を駭かせたものであるが、家庭としても國家としても學校としても、この事に深く顧みる所がなくてはならない。學生のスポーツが普及發達した今日、これは全く不可思議な事に違ひないが、そのスポーツの普及發達振りが誤つた方向方針に於て行はれてゐるのではあるまいか。一と疑はざるを得ないのだ。スポーツなるものが、或は國民の体位向上の線を外れてゐるのではなからうかと疑ふのである。然しながら學生の体位低下振りは、單にスポーツ問題のみでは片付けられない。家庭、社會、國家、それから教育制度一般からの解決によらねばならぬことは勿論であるが、尙學生の体位健康につき附記したい重要な事柄は、彼ら學生は教育程度の進むにつれて、その徵兵檢

査不合格の率が遞増して居り、その原因たる疾病の程度もますます増悪しつつあるといふ事だ、即ち丙種の不合格者は、大學卒業者に最も多く、次が高等學校及び専門學校の卒業者で、これに中等學校卒業生、小學校卒業生といふ順序である。ただ小學校卒業生といつても尋卒のものは高卒のものよりも却て丙種の不合格者が多いのであるが、ここにも大きな社會問題、教育問題が横はつてゐる譯である。

次に、都市生活が小學兒童の健康に及ぼす影響について、調査を進めてゐる市教育局では、本年度（昭和十一年）の小學兒童十二萬八百七十八名から十萬六千八百八拾五名の身体検査を行つた結果、耳鼻咽喉科の患者男兒九千五百六拾四名、女兒八千五百九拾五名、合計一萬八千五百五拾九名を筆頭に各種疾病の所有者が検査兒童の約半數の四萬三千六百七拾七名といふ多數を占め、うち貳百七拾三名は就學猶豫といふ概かほしい状態に、今更不健康地都市の現實に驚くのである。

疾病兒童の内譯は△眼科男四一五二、女九二二三、△皮膚科男二四六八、女一四九二、

△ヘルニヤ、心音不純、氣管支カタル、男二五三五、女一九〇九、△骨關節筋肉故障男八四七女五六〇である。

次に、わが國民の近視眼の多い事實は、世界的に有名であるが、今文部省体育課が全國の學生、生徒および小學兒童について行つた調査は、眞に恐怖すべき結果を示してゐる。すなはち大正拾一年度において、小學校では男一二、九三パーセント女一五、二七パーセントであつたものが、昭和五年には男一六、二四パーセント、女一九、六九パーセントと累進、その他の學校は大正九年度と昭和五年度とに左の如き百分率を示してゐる。

高等女學校	一六、六三	三四、〇七
中等校	二一、七五	三六、三三
實業學校	二一、七二	三四、三八
師範學校 (男)	二六、六五	四三、六五
(女)	一九、二三	四〇、二五

(大正十一年)

(昭和五年)

專門學校 (男)	四一、五三	四二、七一
(女)	二〇、五五	五三、九八

これは極めて大ざつばにいへば、小學校へ入つた時は一割五分の近視眼が、中學校に入る時には二割に増へ、專門學校になると五割となる。これに加ふるに、大体五拾歳以上の人々の老眼や亂視や斜視等を勘定に入れると實社會で活動してゐる人の六、七割の人々が不便を感じるなり、無用に神経を浪費するなりして、活動の能率を下げてゐる譯である。

次に我國に於ける死亡率の多い重なる病氣を左に示してみよう。(昭和十一年の調査)

内閣統計局の調査によると昭和九年のわが死亡總數百二拾三萬四千余人に對して呼吸器その他の結核によるもの拾三萬一千五百餘、死亡者千に對する比率は一〇六、五でこれにつぐは下痢、腸炎による拾二萬七千餘、比率一〇三、六肺炎の拾二萬四千餘、比率一〇〇、五、腦出血、腦栓塞等の拾一萬四千餘、比率九二、七といふこととなつてゐるから、結核の最も恐るべきは明瞭である。これを年齢的に見る時は、下痢腸炎及び肺炎の死亡者は滿一



歳以内の嬰兒が大多数を占め、腦出血、腦栓塞のそれは五拾五歳以上七拾九歳までが甚だ多いのに對して、結核においては十五歳以上二十九歳までの死亡者が、最も多數を占めてゐることは、大なる注意を要するのである。

次に、昭和拾一年六月三日の東京日々新聞の社説に斯うかいてゐる。

(前説略す)

身長と体重とは共に増加し、一見好成绩のやうであるが、体重の増加は身長のそれに伴はず結核性疾患も著しく増し、近眼、齲齒等も次第に夥しくなつてくるといふのは、國民的門題として大いに憂慮すべきところである。近來各種のスポーツが非常な勢ひで國民間に普及してゐる。従つて國民の体格健康は次第に良好に向つて行くべきはづであるとは何人も推論する所であるのに、わが青年の体軀が、この悲觀すべき状況にあるのは何故であらうか。もとよりかやうな事に偶然の分子の多くあるべきわけはない。十分に今日に於てその原因をつきとめ、この憂慮をとり除くのみならず、さらにわが國民の体格をして向上

の途に向はしめることは、いはゆる更始一新の重大なる部門でなければならぬ。」

壯丁体格低下の原因は、固より専門家の調査に待つべきもので、その結果はやがてわが幼少青年育成方法の改善の内容を指示するであらう。しかし大体からみて、幼少青年の發育に重大なる関係のあるのは、環境、食物、勉學、運動の四種と思はれる。環境の身体に非常な影響のあるのはいふまでもない。しかし近來わが人口に於ける都市生活者の割合は年々に増加し、都市の喧騒雜鬧は次第に甚しくなつて行くが、一方その衛生施設も除々に改良せられつつあるから、環境的影響に大きな變化があるとも思はれぬ。食物と肉体との相關關係に至つては今更説くまでもないが國民の食物は時代と共に次第に變化する。齲齒の増加等はこの食物の變化に關係あるものと考えられるから、食物衛生は國民保健の大きな問題として、専門家、實際家の研究すべき方面である。しかし最近一般に國民生活も向上してゐるのであるから、食物が非常に壯丁の体格に悪影響を與へてゐるとは考えられない。しからは残るところは學業と体育の方面である。」

小學校、中等學校その他のわが教育における被教育者の學習上の負擔は、大きな問題になつてゐる。殊に、入學準備教育の弊は何處でも叫ばれてゐる。適當なる勉學はむしろ身体に良好なる結果を與へることは經驗の示すところであるが、過度もしくは權衡を失せる學習の健康に害のあるのは明かて殊に興味のない受動的詰込みの心身を疲勞せしめることは甚だしい。一方、体育の方面に於ては近來わが學校体操は次第に改良せられ、教練も加へられ、さらにスポーツも獎勵せられつつある狀況であるのに、青年の体格が、かく劣弱になりつつあることは、そこに何等か缺陷のあることを示すものではあるまいか。

次に、昭和十五年七月三十日の讀賣新聞にこういふ記事があつた。

「体育偏重が原因か、新入生の結核罹病

新制度入學が投げる赤信號」

學科を廢して体育を重視した今年の中等學校入學試験が生徒にどのやうな影響を及ぼしたか。各方面から注目されてゐるとき、關西の某都市中等學校では、今年入學した生徒の

結核による退學者が續出、ここに体育偏重の弊が叫ばれ、來春の進學準備期を控へ、小學校當局はじめ一般家庭に一つの問題をなげかけました。

右について、厚生省結核課楠本正康博士に伺つてみませう。

結核に冒された中等學校生徒が、入學したばかりの一年生で學年退學するといふ事實は重要問題です。一般に結核に感染する年齢は十五歳以後から廿歳前後が多くなつてゐますが、都會地では小學校時代に感染するものが澤山あり、大阪市の小學兒童などは一年生から六年生を調べると、七〇パーセントといふ驚くべき感染率を示し、東京市の兒童は大阪より幾分少くなつてゐますが、それでも全兒童の半数は感染してゐます。結核菌は肺臓に附着してから一年間が最も危険の時期で、この時過激な体操や運動によつて身体が疲勞し病菌に對する抵抗力がなくなると、發病しますが、この危険期の一年間を異常なく経過すると、病菌は固まつてしまひ、却つて結核に對する免疫力ができてきて、發病せずに済むものです。ところが小學校では、簡單な聽診器だけの健康診斷ですませるので、結核に感染

してゐる兒童の危険状態がハッキリ判定できず、從而學校當局の体育運動は一律に行はれません。この無理をどうやら克服し、懸垂その他の体育考査をパスして中等學校に入ると、運動は更に過激になり、ために感染一年以内の危険期にある生徒は、ここで全く病勢の進行から退學を餘儀なくされるといふ氣の毒な状態になるのです。輕微な熱がでて、身体がだるくなり、食慾が減退するといふ結核發病初期の症状も身体の弱い者には自覺されますが、身体の丈夫な者ほど症状が自覺されぬ爲ますます運動してよいよ身体が耐えられなくなつた時はじめて慌てます。學校當局の注意も必要ですが、この危険期を警戒するには家庭が餘程の注意を拂ひ、健康診斷によつて感染の時期程度を、科學的に確かめてから發病の芽生えのあるものは、過激な運動をやめて療養に努めなければなりません。」

國民保健の問題に就て、最近の英國に於ける状態を示してみよう。

最近一ヶ年間に、保健費用二億ポンドを支出してゐるが、國民の體質は低下する一方である。この外醫療だけの費用が一ヶ年三億ポンド合計五億ポンド（平價換算五十億圓）に

上る莫大な支出が、この上ふえては大變と議會の問題となり、英國皇帝も最近の勅語で、この問題に言及されてゐる。

エヂンバラ大學のリレーン教授は「ここ二ヶ年間國民体育に努力を拂つたら、大いにわが國民の体格は向上する見込がある。もし怠れば弱小体格の回復には二世代を要するだらう。」と警告し、

「オリンピック大會に於ける英國の不振をみよ。これが歴史あるイートンの運動場をもつ英國人とは思はれないのである。」と、

## 体位低下の眞因

以上各般に亘る統計によつて、我國に於ける國民体位の低下が如何に寒心すべき趨勢にあるかは了解された事と思ふ。そうして第一篇に於て詳説したる如く根本原因は勿論種痘及び藥毒である。そうしてその種痘なるものの本來の目的が天然痘疾患を防止するといふのであるが然らば一体天然痘疾患發生の原因である天然痘毒素の原因は何であるか—その發見こそ根本の根本であらねばならない。

それは私の發見によれば藥毒であるといふ事である。然らば藥毒が然毒となるのは如何なる理由と経路によるかといふと、それは藥毒が人体を數代通過する結果一種の毒素化するるのでそれが天然痘毒素である。即ち遺傳によつて成るのであつて、醫學上遺傳微毒と名付けられてゐるものは、實はそれを誤つたのである。故に何よりも天然痘患者の發疹状態が微毒性發疹と酷似してゐる事によつても肯れるであらう。

又、醫家の診斷によつて遺傳微毒とされた患者がその父母、祖父母、曾父母にそれ等の

病歴の無い事實によつて憤慨する事がよくあるのであるが、其際醫家は感染に就て、不品行に依らざるも、他の場合偶然的による事があると言はれるので、素人である患者は泣寝入に終るといふ事もよくあるが、實際上不品行以外の感染は極稀にはあらうが、先づ無いといへよう。之等の事實は全く然毒を遺傳微毒と誤つた結果に外ならないのである。

又別の例として、我國に於ては天然痘發生は約千三百年以前、欽明天皇時代以後であるといふ事である。欽明天皇十三年に佛教が渡來してより、初めて各地に疫病が發生したので、時の執權者は佛教渡來によつて日本の神々が御怒りになつた爲であるとなし佛教を禁じたのであつたが、それにも拘はらず、疫病は更に減退しないので、佛教に關係はないとして再び許されたといふ事が史實にある。それはどういふ譯かといふと、佛教渡來以前、既に漢方薬が渡來し、それが疫病の原因となつたであらう事を想像されるのである。勿論疫病とは天然痘の事である。

そうして、藥劑によつて病氣を治癒しようとした先人の意圖は全く逆効果となつてしま

つたばかりか、病氣治療の方法が「病氣發生の原因」となり、それを繰返して畢に今日の如く体位低下の結果を來したのである。宛かも聖書中の有名な晰であるアダム、イヴがエデンの園に在つて、禁斷の果實を口に入れてから人類の罪が發生したといふ事と同様である。

次に今一つの例として、日本人の壽齡の著しく短くなつたといふ事である。畏多き事ながら、神武天皇より景行天皇迄の御歴代の御實算は非常に御長齡で被在られ、大方は百歳以上に涉らせられたといふ御事は歴史上明かであつて、これは全く我國上代に於て、藥劑なるものが無かつたからである」と拜察さるるのである。

又、彼の秦の始皇帝が「東海に蓬萊島ありその島人は、頗る長命である」といふので、如何なる靈藥があるか探し求めよとて、臣の徐福に命じたのである。彼は早速、蓬萊島に渡來した。勿論、蓬萊島とは我日本の事である。徐福が渡來し、如何程探し求めても、靈藥などはある筈がない。何となれば、その時代の日本には、藥劑が無いから長命であつた

のである。於是、流石の徐福も本國へ還る能はずやむなく日本に於て生を終つたといふ事である。それで、現に今以て徐福の墓は、四國の某所に在るといふ事である。

( 藥 毒 )

今日迄、西洋醫學に於ては二千五百年以前ヒポクラテス創始の醫道以來、又支那の醫祖伏羲が、五千年前創始せられた醫道は固より其他幾千萬の病氣療養の方法は、盡く淨化作用停止又は一時的苦痛輕減の方法以外には出でなかつた事は再三述べた通りである。そして最も効果ありとしたものが、藥劑療法であつた。

そうして藥毒なるものは、常に淨化作用停止だけではなく、その人間の健康に及ぼす悪影響は實に想像されたい程の恐るべきものがある。私の長い經驗によれば、凡ゆる痛苦は悉く藥毒の結果であつて、痛みも發熱も不快感も疲勞も神經衰弱も原因はそれであり、全身的新陳代謝の衰耗も機能の弛緩も、咸く藥毒の結果である。從而、人間の健康の良否も病氣の輕重も、藥毒の多寡に因る」といふも過言ではないのである。

今日迄、人間が一度病氣に罹るや、淨化作用を藥毒によつて停止するが、それ以外、藥毒なる新しい毒素を追増するのである。その例として、何よりも周知の事實は、醫師が醫療を行ひつつ、餘病が發生するといふ事である。最初の病氣を治療する目的であるに拘はらず、第二第三の病氣が發生するといふ事は甚だ不合理ではあるまいか。即ちその療法が適正であるならば、最初の病氣が輕減しつつ餘病など發生すべき譯はない筈である。即ち拾の病氣と假定して、時日を経るに従ひ、九となり八となり七となるやうに、漸次輕減しなければならぬ筈である。然るに何ぞや、治療を施しつつあるに關はず、十一となり十二となり、十三となるといふやうに増加する不可解極まる事實である。之に對し、患者も醫家も、何等の疑念を起さないものであるが、これは全く、醫學が一種の迷信化するまでに到つたためであると思ふのである。

故に、私は斯う想像するのである。日本人が藥劑使用を全く中止し拾年経たなら、恐らく病人は半減するであらう。從而日本人の壽齡は延長し、數十年を経るに於て、平均壽齡

八拾歳位は易々たるものであらう。何となれば短命とは病氣に因る死であるからである。所謂不自然死である。病氣が減少すれば自然死が増加する。自然死といへば、少くとも九拾歳以上でなければならぬ筈である。又人間が死に際會して苦痛が伴ふといふ事は、天壽ではないからであつて、天壽を全うして死ぬといふ場合は、例へば樹木が樹齡盡きて自然に仆れるが如く、聊かの苦痛もないのが當然である。そうして死の苦痛の原因は何か、言ふ迄もなく、藥劑其他の方法によつて淨化作用の停止を行ふからである。即ち自然である淨化作用を、不自然なる抑止をする―その摩擦が苦痛となるのであつて、而も、衰弱し切つた肉体であるに於て、苦痛は倍加するといふ譯である。

古から、人は病の器”といふ言葉があるが、之は大いに謬つてゐる。實は、人は健康の器”であり、健康が原則であらねばならないのである。神は人間をして、神の理想を此地上に顯現せんが爲に生ませられたものである―と私は信ずるのである。従つて、其使命を遂行するに於て不健康であつてはならない。故に不健康といふ事は、人間が何等かの過誤

即ち神の攝理に反してゐるからで、その過誤の最大なるものが、藥劑使用”である。

次に、今一度私の事を言はして貰はう。元來私自身は、生れながらにして頗る虚弱者であつたから、四拾歳位までは、人並以上の藥劑崇拜者で、殆んど藥びたりといふ程で、それまでは、健康時より罹病時の方が多かつたのである。然るに會々或動機によつて藥毒の恐るべき事を知り、斷然癒めたのであつた。それから一年一年健康に向ひ、二拾數年後の今日では、實に壯者を凌ぐほどの健康体である。又私の家族十數人も、今日稀にみる健康体の者ばかりである。其他私の説を信じ、それを實行してゐる人達は例外なく、年々健康になりつつあり、健康家族が造られつつあるに察しても、疑ふ餘地はないのである。

私は爰で、今一つ重大な事を述べなくてはならない。それは藥毒保持者は、左の如き悪影響を受ける事であつて、それが多量ほど甚だしいのであるが、世人は全然氣が付かない事である。

一常に不快感のある事。

- 二 頭腦の活動が鈍くなる事。
- 三 身体の動作が弛緩する事。

右の三項目に就て詳説してみよう。

一 の不快感は、薬毒集溜個所に微熱があるから、局部的又は全身的に悪寒があるので、常に普通以上寒がるのである。又、何事を爲すにも億劫がり、寝る事を好み、物に倦き易く長く一つ事に據はる事が出来ないのである。そうして物事の解釋は凡て悲觀的となり、常識を缺き、陰鬱を好み、從而、晴天の日より雨天の日を好むのである。又腹立ち易く、甚だしいのは自暴自棄的になつたり、又常にクヨクヨとして、些かの事も氣にかかり、ヒステリーのともなり、自分で間違つてゐる事を知りながら、どうする事も出来ないといふ状態で、又それを煩悶するといふ事になり、最も甚だしいのは厭世的となり、廢人同様となる人さへある。

一家に斯ういふ人が出来ると、他の者まで影響を受けて、家庭は暗く、争ひの絶間がな

いので、人生の幸福を得る事は到底期し難いのである。

二 現代人は非常に頭腦が鈍くなつてゐる。從而、記憶の悪い事も夥しい。故に、今日重要な地位にある人の講演が、殆んど原稿なしではやれないといふやうになつてゐるが以前は原稿を持つ事は恥のやうにされたといふ事を聞いてゐる。

幕末期、彼の杉田玄白や高野長英等の人々が蘭學を翻譯するに當つて、参考書も碌々ないのに兎も角やり遂げたといふ事は、餘程頭腦が良かったに相違ないと思ふ。現代人にはそういう人は殆んどないであらう。又辨慶が安宅の關に於て、白紙に向つて勸進帳を詠んだ如き、稗田阿禮があれ程浩瀚な古事記全卷を記憶してみた如き、實に日本人の頭腦の優れてゐる事は、世界無比であらう。

又、現代人は簡單明瞭な所説では、充分頭へ入らないやうである。諒々しく、微に入り細に涉り、又種々の例證を擧げて説かなければ、會得が出来ないやうである。本來、頭腦の良い人は、一言でその意を悟り得るのである。昔の諺に「一を聞いて十を知る」といふ



事があるが、現代人は「十を聞いて一を知る」のが關の山であらう。又、實際よりも理論を重んずる傾向があり、その爲に、醫學なども理論に偏して、實際を無視したがるのである。

又、政府が新しい施設や政策を行ふ場合、國民に對してラヂオや新聞やポスター等、これでもかこれでもかと宣傳に努力しても、國民が速かに理解し實行しないといふ事實は全く今日の國民全般の頭腦が鈍くなつてゐるからである。と惟ふのである。

現代人の動作の遲鈍なる事は、また甚だしいのである。之は、國民の大部分がそうであるから氣が付かないのである。特に、都會人の歩行の遅い事は驚く程である。之は身体が鈍重である爲である。

昔の武士や武藝者等が、咄嗟の場合、飛鳥の如く身をカワしたり、又飛脚屋が一日二十里を平氣で日歸りしたりしたというやうな藝當は、現代人には到底出來得ないであらう。

元來、日本人は、外國人に比べて非常に身が軽く、動作が敏捷であるのである。日本人

の飛行家が特に優秀であるのは、何よりの證據であらう。

從而、人間の不幸も争ひも、その根本は、藥毒にあるといつても過言ではないのである。故に、藥毒のない人間の社會が出現するとしたら如何に明朗であるかを私は想像するのである。全く藥毒が無くなつた人間は、頭腦明晰で、爽快感に充ち、生々潑刺としてゐるのである。

#### 非科學的醫學

今日、如何なる人と雖も、西洋醫學を以て科學である事を信じない者はないであらう。

然し私は、西洋醫學は科學とは思へないのである。

本來、自然科學とは、あるが儘の自然の實體を掘り下げて、その法則を知る事である。そうしてそれによつて文化の進歩向上に役立たせる事である。從而、眞に自然の法則を把握するに於ては一定の規準なるものが生れる筈である。然し乍らそれは人間以外のものであつて、例へば動植物は固より凡有る無機質類に至るまで、科學する事によつてその本質

を把握し、法則を基準を知る事を得るのである。

右の如く科學は、人間以外のすべてに對して神秘を暴き、福利を増進せしめ得るので、その功績に幻惑し、人間をもそれと同一であると思惟し、科學し續けてゐるのであるが、その事自体が一大誤謬である事を私は發見したのである。

私の言はんとする所は其點であつて、人間なるものは一切とは別の存在で、他の一切の範疇には入らない事である。即ち人間は現代科學では絶對解決出來得ないといふ事を先づ知る事が人間を科學する法則の第一歩である。そうして、人間以外の一切を科學する方法が悉く機械を用ひてゐる。科學と器械とは分離出來得ない事實である。從而、人間の生命をも機械によつて解決しようとして企圖したのが西洋醫學の根本理念であつた。

右の意味を端的にいへば、本來唯心的である人間に對し、唯物的に解決しようとする一それが根本的誤謬である。何となれば唯心的である人間に對しては唯心的に解決すべきでそれが眞の科學的法則である。勿論人間は肉体を有つてはゐるが、その肉体と雖も、人間

に於ては唯心的に解決され得るので、それが根本原則である。そうして唯心とは精靈であり、唯物とは肉体であるが、その關係は別に詳細説くつもりである。

之によつて、眞の意味に於ける人間科學を知り得るであらう。勿論、非人間科學と人間科學との隔たりが如何に大きいかといふ事も知り得るであらう。之を識るに於て、現在の唯物的科學を以て人間に對する時、それは非科學的になる事である。

以上の意味によつてモルモットや廿日鼠を如何程研究して人間に應用しようとしても、それは意味をなさないのである。又第一人間と他の動物とを比較してみるがいい。その思想感情や、その形体動作、體質、食餌、生活等あらゆる點に於て人間との異ひさの餘りにも大きい事である。彼は足が四本あつて尾があり直立して歩けない。全身の厚皮、硬毛は勿論、言語も嗅覺も聽覺もすべての異ひさは之以上書く必要はあるまい。その位異ふ動物を研究したとて、人間に當敵まる譯はないのである。故に一言にしていへば、形而下的理論と方法を以て、形而上の問題を解決しようとしてゐるが、現在迄の醫學である。

此意味に於て、醫學上進歩したと思惟し、發見し得たと喜ぶ凡ゆる方法は、實は眞の解決ではなく、一時的非科學的解決でしかないのである。而もその一時的解決と其方法が、反つて、その方法施行以前よりも悪結果を及ぼすといふ事に想ひ到らない。その短見である。故に、醫學は進歩したといふに拘はらず實際に於て、病氣が治らない。病人がフえる体位が低下する。結核の蔓延、人口の遞減等々の逆効果の顯著なるのは、やむを得ない事であらう。

以上は全く、私の言ふ。非科學的醫學の進歩による逆効果に外ならないのである。

そうして、現代人の中にも、西洋醫學の餘りにも無力であるのに對し、漢方醫學や鍼灸や民間療法に趨る者が、日に月にフえつつあるのは周知の事實である。又、醫學専門家の中にも、漢方醫學を研究したり、灸點を應用してゐるといふ話も往々耳にする處である。然し乍ら一般人としては、西洋醫學の無力と不合理を疑ひつつも、誤謬の一部をさへ窺知し得ないが爲、それに生命を委するより外、途がないといふのが、現在の社會状態である。

彼のロック・フェラー研究所の碩學アレキシス・カレルのノーベル賞を貰つた名著「人間と未知なるもの」の要旨を一言にしていへば、現代科學は「人間に就ては何も知らない」といふことである。

次に私は、種々の例を擧げてみよう。

茲に、醫家の子女が病氣に罹つたとする。然るに、不思議な事には、大抵は父である醫家が診療しないで、友人等の他の醫師に依頼するのである。常識で考えても、大切なわが子女の病氣を、自分の手につけないうで、他人の手に委せるといふ事は、全く自己の醫術に自己が、信頼出來得ないからであらう。實驗上、自分が診療するよりも、他人に委した方が、より結果が好いからである。然らば、これは如何なる譯であらうか。醫家としても、恐らくこの説明は出來得ないであらう。それに對し、私は斯う思ふのである。醫學は、淨化停止であるから、醫療を加へるほど病氣は悪化する。わが子女である以上、熱心と、能ふかぎりの療法を行ふ。勿論、藥劑も高級藥を選ぶであらう（高級藥ほど、藥毒が強烈で

ある。一から、結果はわるいに定つてゐる。然るに、他人に於ては、普通の療法を行ふから悪化の程度が少い。それで、治療率が良いのである。又、醫家に於て、斯ういふ経験が良くあると聞いてゐる。それは、是非治したいと思ふ患者ほど治り難く、それほど關心をもたない患者は、反つて治りが好いといふことである。これ等も、前者と同様の理に由る事は勿論である。

又、少し難病になると、醫家の診断が區々である。一人の患者に對し、五人の醫家が診断するに於て、おそらく五人とも診断が異なるであらう。これ等も、科學的基準がないからである。故に、私は、醫學は機械的ではあるが、科學的ではないと言ふのである。

そうして、西洋醫學の診断及び療法が、如何に無力であるかを、最近の例を以て示してみよう。それは、先頃物故した、帝大名譽教授長與又郎博士である。同博士は、癌研究に於ては、實に世界的權威者とされてゐる。それで、同博士は以前から「自分は癌で斃れる」と言はれてゐたそうであるが、果せるかな、死因は癌病であつたのである。發病するや、

各名國手も、博士自身も、疾患は肺臓癌と診たのであつた。然るに、死後解剖の結果、癌の本源は腸に在つて、それが、肺臓内へ移行したとのことであるから、この腸癌は、生前發見されなかつたのである。この事實によつて、私は冷靜に検討してみる時、斯ういふ結論になると思ふ。

一 長與博士程の大家が、自身の癌發生を防止し得なかつた事。

二 又、自身腸癌の存在が、明確に知るを得なかつた事。

三 各國手が診察しても、腸癌の發見が出來得なかつた事。

四 博士自身は固より、各國手が如何に協力しても治療し得なかつた事。

右に對し、私は多くをいふ必要はないと思ふ、唯だ、現代醫學の價値を、事實が證明したと思ふのである。

次に、數年前物故した有名な入澤達吉博士の死因は盲腸炎といふ事である。其際各地から恩師の重態を聞いて集つた博士は百二十拾數名の多きと算したといふ事である。斯様を多

數の博士が頭腦を搾り、大國手自身に於ても無論苦心されたと思ふが、それにも關はらず治療し易い盲腸炎の如き病氣が治療し得なかつたといふ事は情ないと思ふのである。其時同博士は、次の如き和歌を一首詠んだといふ事である。

「効かずとはおもえどこれも義理なれば  
人に服ませし藥われのむ」

そうして醫家が診断に臨んで、過去に於ける關聯的事項として、父母の死因や兄弟姉妹の死因又は病氣の有無、患者自身の病歴等、實に微に入り細に涉つて訊問し、それ等を參考として診断を下すのである。勿論、慎重を期するといふ理由からであらうが、實は患者の身体だけの診査のみでは、適確なる診断を下せない結果、やむを得ず右のやうな手段を採らざるを得ないのであらう。然乍ら、私は思ふのである。本當に進歩した醫學とすれば患者現在の肉体を診査しただけで、病原は明確に判明しなければならぬ筈である。然し乍ら、その様に簡單にして速かなる診断は可能でありやと言ふであらうが、私はその可能

である事を明言するのである。何となれば、私が治療に従事してゐた時、そうであつたからである。

又、眞の醫術とは、その療法が聊かも患者に苦痛を與へない事である。寧ろ治療の場合快感を伴ふ程でなくてはならないと私は思ふのである。そうして治療迄の期間が速かなる事を條件とし、治療後に於て何年経るも絶対に再發しない事の保證が出来なければならぬのである。そればかりではない。豫後の健康法を教へ、それによつて患者は、發病以前よりも健康が増し、再び醫師の厄介にならないやうにならなくてはならないのである。斯様な理想否空想とも思はれる醫術が果して生れるであらうか。といふ疑は何人も起るであらう。がそれは己に生れてゐるのである。

然るに、西洋醫學の現在を見るがいい。その餘りにも非文化的ではないか。にも關はらず、その非文化的である程、反つて文化的と思惟する現代人の錯覺と迷蒙は、憐れむべきものがある。見よ、一寸した病氣に對してさへ肉を切り、血液を消耗させ、痛苦を與へ、

不快に惱まし、而もそれ等に對し、手術料の名の下に、驚くべき高價な料金を費やさしめ而も治療迄に長時日を要し、再發の憂を無くするには、身体の一部を毀損しなければならぬのである。之等の現實に對し、醫學は進歩したといふが、それは全く、眞の醫術なるものを知らないからである。

今や、此地上には、病氣滅消の時が來たのである。私は徒らに大言壯語するのではない眞の狂人に非ざる限り、確實なる論據と實證とを把握し得ないで、斯の如き言を吐けるであらうか。

之を譬へていふならば、既成醫學は鶏卵である。己に内部にある雛は、時來つて小さな嘴を以て、殻を破らんとしてゐるのである。今や人類にとつて眞に役立つ所の生きた雛が呱呱の聲を擧げんとしてゐる。それを私は、一日も速く、我同胞に知らしめたいのである。

### 人的資源と現代醫學

今日の重大時局に於ける我日本の最大目標としては、言ふまでもなく、大東亞共榮圈の完遂である。而も、之を達成する最大要素としては、何といつても人的資源の問題であらう。當局が、産めよフヤせよと、あらゆる方策を施行しつつあることもそれが爲である。然し乍ら、一步退いて考える時、斯ういふ譯にならう。

即ち今生れた赤兒は、少くとも向後二十年を経なければ、實際の役には立たないのである。此意味に於て、現在切實に要求する人的資源は、どうしても青年期の、現にその職域に奉公してゐるものでなくてはならない。最近政府が實行した國民登録者の年齢が、男子に於て十六歳以上四拾歳迄、女子に於て十九歳以上二拾五歳迄としたのは宜なりといふべきである。

この意味に於て、最も急速に人的資源を増強するといふには、罹病者を無くするといふことほど、絶對的効果のある方法は、他にないであらう。然るに、今日社會各層を見るが

いい。およそ罹病者の多い事實は、恐らく空前ともいふべきで、日本人中、眞に完全なる健康体は何人あるであらうか。想像するさへ不安の極みである。それは、曩に示した各種の統計によつても、讀者は充分肯き得たであらう。

今日の醫學が、病人を作る醫學であり、醫療によつて輕病者も重病者となり、終に死にまで到らしむるといふ事は充分説明した通りである。而も醫療は、最も増加の趨勢にある結核患者に對し、絶對安靜を奨めるが、それ等の方法によつて完全に治療するならば、或期間の職業放擲もやむを得ないとするも、その殆んどが長期間安靜の結果、終に生命を失くするといふに至つては、實に國家の損失は鮮少ではあるまい。而も長期間安靜患者を看護するに要する人員や、それに使用する藥劑器械等を製造する人員、資材等精細に計算する時、實に想像以上の莫大な數字に騰るであらう。

今一つ厄介な事がある。それは早期診斷の一事である。曩に説いた如く初期の結核患者は放置しておけば其殆んどは自然治療するのである。然るに早期診斷によつて初期的症狀

が発見せられるや、強制的に醫療を施されねばならず、隔離もされなければならぬのである。而も結核症を暗示又は宣告せられるので、患者は先づ不治的絶望觀念によつて、精神的に大打撃を受ける。それが先づ元氣を喪失させ、食慾を減退させるから、急速に衰弱するのである。加ふるに、藥毒其他の病氣増進方法を施すに於て、靈肉共に重症に向ふのは判り切つた話である。

以上の如き事實は、今日當事者は素より、何人と雖も常に見聞する所であらう。私は、聊かの誇張もなく現實を述べたつもりであるから、醫家は勿論、患者諸君に於ても、此文を讀む時、思ひ半に過ぎると思ふのである。

右の如き事實によつて、私は人的資源を阻止する最大なる原因は、醫學そのものである事を斷言するのである。之に目覺めない限り病者は彌々漸増し、政府が如何に懸命になつて對策を講じようとも、遺憾乍ら人的資源の不足は解決され得ないであらう。而も醫學に依存する以上、焦慮すればする程、逆効果が甚だしくなるから、其前途は實に寒心の外な

いのである。嗚呼！此重大事を如何にして一日も早く、我國民に知らしめ得べきやと私は日夜痛心してゐるのである。

そうして政府は、人的資源の不足を補ふ爲中小商工業の整理統合を行ひ、人的資源を泛び上らせては、それを重要産業に振向けてゐる。然るに一方に於ては、体力管理や早期診断によつて、重に結核の初期を發見しては、それ等を靜養又は隔離する方法をとつてゐる故に、右の結果はどうなるかといふと、一方人的資源を浮び上らせると、それを一方では消滅させるといふ、恰度、策へ水を汲んでゐるやうな行り方である。

尙且つ、從來輕労働であつたものを、工場勞務者の如き、激しい労働に轉向させる以上猛烈なる淨化作用が起るのは必然であるから微熱、咳嗽、疲勞感等、結核的症狀が發生するので、いよいよ人的資源は不足するのは當然である。然るに、整理統合によつて浮び上らせる資源には限度があるから、いづれは人的資源の一大不足に惱まされる時期が來ないと誰か言ひ得るであらう。

そうして、私の創成した此醫術を政府が採用し、之を國家全体に施行するとすれば、その結果はどうなるであらうかを、私は想像して書いてみよう。それは先づ病者は日に月に漸減してゆく。殆んど病者は仕事に従事しながら治療してゆく。特に肺結核は激減し、感染の恐怖からも解放せられるであらう。傳染病も漸減するは勿論、傳染病で死亡する者は極僅少となるであらう。從而、傳染病菌の恐怖からも解放されるであらう。何とをれば病菌が侵入しても發病しないといふ健康体になるからである。そうして大抵の病氣は一週間以内で治療するのであるから、人間は病氣の不安から全く解放されるであらう。

榮養食の必要もなくなり、故らなる健康法の必要もなくなるであらう。人間の壽齡は年々延長するであらう。そうして健全なる肉体には、健全なる精神が宿るといふ事が眞理であるとするれば、國民の思想は、肉体の健康に比例して健全になるであらう事は勿論である。そうして不幸の最大原因が病氣であるとするれば、不幸も貧乏も争ひも著減する事は言ふまでもないであらう。



現代行はれてゐる西洋醫學に於ける病理はその殆んどが細菌説である。凡ゆる病氣に對し、細菌によつて傳染すると解されてゐる。感冒までも細菌の作用とされてゐる。そうして感冒菌の如きは顯微鏡でも視るを得ない微小なるもの、それは濾過性細菌と稱してゐる。そうして醫學に於ての解釋は、感冒、デフテリヤ、百日咳、麻疹、流行性耳下腺炎などの病氣は、泡沫傳染といふ事になつてゐる。之は、戸を閉め切つた室内や乗物の中で、患者の嚏や談笑の際など、霧の如く唾と一諸に飛出し、空氣中に浮游してゐるのを吸込んで感染するといふのである。そうして老人は、比較的免疫になつてゐて、青年特に小兒が冒され易いとして、患者に一米以上接近してはならないといふのである。

斯様に、殆んどの病氣は傳染するといふのであるから、之を信ずるとしたら、現代人は生きてゆく事さへ、恐怖の限りである。

次に、空氣以外、最も直接的である細菌の巢窟は何といつても、貨幣に如くものはある

まい。之に就て「北大醫學部衛生學教室阿部三史學士が、郵便局、銀行、市場、デパート、食堂、食料品店、個人等多く利用される處から十圓札、五拾錢銀貨、拾錢白銅、拾錢ニツケル、一錢銅貨等取り交ぜ三百四拾五個を集めその銀貨なり、札なりに附着してゐる細菌を研究した結果、左の如く大腸菌、バラチフス菌、葡萄球菌、コレラ菌、分列菌等々、數へきれない程の細菌が附着してゐた。これ等は何れも人体に害を及ぼすもので、殊に小さな子供等が、無心で銅貨銀貨をなめてゐるなど大いに注意を要するものであり、一方多くの人は、銀貨、銅貨に、結核菌が附着してゐると思つてゐるだらうが、阿部氏の研究では結核菌は案外少く、人体に及ぼす程の偉力はないと言はれてゐる。

(昭和十一年六月調査)

「各種貨幣の細菌數」

先づ十圓札、五拾錢、拾錢、一錢各一枚にどれだけの細菌が附着してゐるかと言ふと、△拾圓札には、普通細菌が最高拾六萬九千五百個で

平均、五萬二千四百九十一個

△五拾錢銀貨には平均千五百五拾九個

△拾錢白銅には二千四百七拾個

△拾錢ニツケル白銅には二千二百三個

△一錢銅貨には、千三十二個

等である。

「病菌の種類と數」

更に大腸菌、チフス菌、バラチフス菌等がどれだけついてゐるかと言へば――

△拾圓札には 五拾四個

△五拾錢銀貨には 四個

△拾錢白銅には 三個

△拾錢ニツケル白銅には 一個

△一錢銅貨には

四個

一等で、十錢ニツケル白銅が、他の貨幣より少ない事は、發行されて間もない事によるもので、なほ一錢銅貨には比較的微菌の附着數が少ない事は、銅自身が持つてゐる殺菌性に依るものである。

「場所と微菌數」

然らば、何處で使はれてゐる貨幣に、最も多くの微菌が附いてゐるかといへば一番多いのが市場、次いで郵便局、日用雜貨品店、百貨店、食堂、菓子店、食料品店、個人所有等の順序になつてをり、個人所有が一番少ないが、これは財布の中に入れられてゐる關係上空氣が外部と異つて流通しないため、附着した微菌が培養されない爲である。」

以上によつてみても、貨幣には如何に多くの凡ゆる病菌が附着してゐるかを知らざらう。然し乍ら、貨幣を手にする毎に消毒することは、如何なる人と雖も不可能であらう。又、空氣傳染が恐ろしいといつても、電車や汽車に乗らない譯にはゆくまい。故に、病菌

から全く遁れ去るには、遙かなる沖合における海上生活か無人島か又は社會と全く交通を絶たれた山奥に一軒家を建てて生活するより以外、理想的方法はないであらう。然し、そのやうな事は何人と雖も、到底出來得る事ではない。故に、假令、病菌が体内に侵入しても發病しないといふ健康体になるより外に絶對的安心の方法はないのである。然らば、其様を健康は可能でありやといふに、私は可能である事を斷言して憚らないのである。それに就て、有力な一つの實例を示してみよう。

それは、昭和拾年九月三日の讀賣新聞の記事によれば、東京に於けるパタ屋即ち屑を扱ふ人間が一萬二千人程居るが、市社會局では昨年十二月中旬、足立區を中心として、認可のある屑物買入所所屬の拾ひ子に就て、詳細な調査を行つたが、二日その結果を發表したそれによると、あれ程不衛生な仕事に従事してゐながら、彼等の間に傳染病其他の病人の少い事は意外である、そうして調査人員二千四百拾五人の中、女子は僅かに六拾人の少數であつた。調査人員の年齢は三拾一歳から五拾歳に至るものが一二九九人を數へて、全員

の過半数を占めてゐる。健康状態は、慢性胃腸病患者が最も多く、次にアルコール中毒者といふ順である。そうして傳染病、肺結核、性病が割合少ないのである。即ち二四一五人のうち、健康なるもの二二二三人、虚弱者八十五人、老衰者五十八人、不具者三十五人、廢疾八十五人、その他の疾病三拾二人となつてゐる。

右の例によつてみても瞭かなる如く、病菌による傳染病は殆んど無いと言つてもいい位である。故に如何程病菌に接觸する者と雖も健康者なるに於て、容易に傳染するものではない事を知るであらう。

次に、病菌なるものは、今日迄人類に害を及ぼすものとされ恐れられてゐるが、之はあながちそうとのみ言へないのである。或は、有益であるかも知れない。何となれば、此世に存在する限りの如何なる物と雖も、人間に不必要な物はない筈である。もし必要がなくなれば、自然淘汰されるのが眞理である。但だ、無用であるとか有害であるとかいふやうに、人間が勝手に決めるのは、今日の文化の程度に於ては、其物の存在理由が不明である

からである。それに就て私は、病菌と傳染病に就て、私の研究の結果を説いてみよう。之によつて専門家は固より、讀者諸君に於て判斷せられたいのである。

抑々、傳染病なるものは、他の病氣と等しく淨化作用であつて、それが頗る急性なる爲人間は恐れるのである。そうして病菌の活動によつて、血液中に存在する或種の毒素を、解消する爲の攝理である。勿論不淨血者は、不健康で、人生の活動に支障を及ぼすからである。然らば、病菌による傳染とは、如何なる経路と如何なる理由によるかを解いてみよう。

最初、病菌が人体の皮膚、粘膜、食物等から侵入するや、速かに血液中に進行する。然るに、血液中の毒素なるものは、實は微菌の食物となるので、菌は其食物を喰ふ事によつて繁殖する。故に、食物が多い程、繁殖するのは當然である。そうして、微菌が食物を食ひながら非常な勢を以て繁殖し、或數の子を生むや、次々死滅するのであつて、その死骸は、出血、糞尿又は喀痰、唾液等に混じて排泄されるので、之によつて完全に淨血作用が

行はれるのである。故に、赤痢、チブス、麻疹、天然痘、疫痢、百日咳等、總て傳染病の豫後は、發病以前よりも健康になるに鑑て、右の理は明かである。然し、傳染病恢復後、健康が拂々しくない者もあるが、之は醫療によつて淨化作用を抑止するから、毒素が残存する爲である。又、醫學上保菌者といふのがあつても發病しないのであるが、之はどういふ譯かといふと、微菌の食物が少しあるからである。即ち生存するだけの食物はあるが、繁殖する程はないのである。従つて、全く毒素の無い淨血の持ち主は假令微菌が侵入しても食物がないから直ちに餓死するので、傳染しないといふ事になるのである。故に私は斯う言ひたひのである、それは傳染といふ名稱は當らない。誘發といふ名稱が妥當である。いと

右の理によつて、微菌の存在理由は判つた事と思ふ。即ち人間に對し淨化作用を行ふいはば、毒素の掃除夫のやうなものであるから、寧ろ傳染否誘發をした方が健康上良いのである。故に、實際上からみても、高度の文明國が傳染病の著減を誇り乍ら体位が低下

し人口遞減といふ問題に悩まされつつあるに對し、傳染病の多い非文化民族が右の反對である状態に思ひ及ぶ時、私の説の謬りでない事を知るであらう。

即ち、高度文明國民は濁血の持主でありながら、病菌を極力防止する結果、傳染病が著減したのである。前述の如く、淨血者のみになつて、傳染病が減少又は絶無になる事こそ理想の健康民族といふべきである。そうして勿論血液中の毒素とは、その殆んどが藥毒である事はいふ迄もないのである。

爰で私は、再び結核その他に就て説明する必要がある。それは醫療に於ては殺菌と稱し菌を殺滅せんとして、そのみに熱中してゐる。微菌さへ殺滅すれば、病氣は治癒するやうに解してゐるが、之程誤りはないのである肺結核の如き菌のみを殺さんとしても、それは到底不可能である。何となれば、服藥、注射等が、血液其他を通じて、結核の病竈部に達する迄には、藥劑の殺菌力は殆んど無力同様になるであらうからである。もし病竈部に殺菌力が消滅しないやうな、強烈な藥劑であるとしたなら、そのやうな藥劑は、使用する

やたちどころに生命の危険に及ぶのは判り切つた話である。故に、藥劑による殺菌作用は如何程研究しても、それは全く無益の努力に過ぎないと思ふのである。

然らば、その殺菌の目的を達成せんとするには如何なる方法が妥當であるかといふに、それは菌の繁殖をして不可能ならしめる事である。即ち、菌の繁殖の原因を除く事である即ち菌の食物を絶無にして餓死せしむる事でそれ以外に方法はあるべき筈がないのである。そうして食物皆無とは、淨血者になる事である。淨血者になるには、藥劑を使用しないことである。然るに今日の醫療は、微菌の食物の原料を供給しながら、微菌の繁殖を防がうと努力するのであるから効果は擧がらないのは當然である。それでやむを得ず、消極的防止方法に努力する譯である。

爰で注意したい事がある。それは私の研究によれば、結核の微菌と虎列刺、赤痢、チブス等の如き微菌とは全然性質を異にする事である。それは、後者は傳染するが前者に於ては傳染しないといふ持論である。従而、此意味に於て、後者は防疫の必要があるが、前者

は何等消毒の必要はないと思ふのである。

榮 養 學

現代醫學に於て榮養學は相當進歩されたと思はれてゐる。そうして醫學に於ける解釋は次の如くである。

(某専門家の記事による。)

「私どもは、毎日誰でも三度は大概缺かさずに食事をする。これは日常体内で失はれてゐる物質を補ふためと、一方では新しく身体の組織をつくる必要からである。

かうして体内では、斷えず分解作用と合成作用の二つが行はれてゐるのである。新陳代謝といふのはこの二つを總稱したものである。ところで体内で食物がそれぞれ消化吸収されてそれから補給物質になつたり、合成物質になつたりするまでには、どんな經過をたどるのであらうか。

まづ蛋白質からいふと、消化器の中で分解されてアミノ酸になつたのは、腸壁から吸収

されて血液の中へ入り肝臓を通過して血液と一諸に全身に送られて、各組織に分配されるのである。かくして組織に達したアミノ酸は、そこでそのところの組織に特有な蛋白質に組立てられ、一部分はアミノ酸からさらに分解されて尿素、尿酸、アンモニア、クレアチン、クレアチニンそれに無機鹽類となつて尿の中へ排泄されるものである。以上のやうに蛋白質は消化するとアミノ酸として組織の合成に用ひられるが、一部は含水炭素や脂肪と同じやうに燃焼して運動エネルギーとなるものである。蛋白質はこの程度にしておいて、つぎは含水炭素だが、この方は最後には單糖類のブドウ糖に變化して腸壁から吸収されて靜脈へ入り門脈によつて運搬される。したがつて含水炭素を一時に澤山とると、血液の中の糖分が増加してくる。そして澤山とつた時は肝臓に行つてグリコーゲンとして貯へられ必要に應じて再びブドウ糖となつて補給されるのである。このブドウ糖は血液中の酸素によつて酸化燃焼して、主として運動エネルギーを供給するが、同時に此場合澤山の炭素ガスを生ずる。運動が激しければ源しい程ブドウ糖の酸化作用はさかんで、これに従つて肝臓

に貯へてあるグリコーゲンが引張り出されて補ひをつけてゆく。しかしブドウ糖の酸化によつて炭酸ガスを生ずる迄には、いろいろの中間産物がある。尿酸はその一つで、従つて尿酸の量を測ると疲労の程度が分るといつてことも行はれる。

なほこの外に含水炭素の一部分は、体内で變化して脂肪が増加して次第に肥滿してくるといふことに在るのである。つぎに脂肪であるが、これは胃の中で一部は消化吸収されることがあるが、大部分は腸へ行つてから脾液中の脂肪分解酵素ステアブシンのために、脂肪酸とグリセリンに分解され、腸壁を通つて吸収され、再び脂肪となり、淋巴液と一諸に乳状態となつて体内をめぐり靜脈へ入つて、脂肪の一部はその後体内脂肪として蓄積され、一部は酸化燃焼してエネルギーとなる。しかし含水炭素と違つて、これは主として熱のエネルギーとなつて行くのである。」

右の如く、その説明は詳細を極め、一見洵に感心されるので、一般人が信ずるのも無理はないのである。

然し乍ら、如何に詳細を極めたる説明と雖も、それは死体の解剖や食物の分析、排泄物の試験等によつて得たる醫學者の推定的想像の範圍を出でないと思ふのである。何となれば、人体の組織機能とその活動によつて表はれる處の生活力なるものは、現在科學の水準よりも遙かに高度であり、深遠であるからである。從而、今日人間の健康に對し營養學的に解釋し得たとしても、それは煙突内から天を仰いで天の大きさを知つたと言ふに等しいものであらう。又名畫の價値を定むるに當り、紙代と繪具代と勞銀によるやうなものであらう。

之を要するに、神秘靈妙なる人体とその生命を知悉せんとするには、現代科學は未だ餘りに水準が低いといふ事を認識しなければならぬのである。勿論科學の進歩は何れの日かはそれを知り得る程度に達する事も豫想されるのであるが、私は科學者ではないから、科學的に説明はしないが、實際と經驗によつて、眞の營養學は如何なるものであるかといふ歸納的論理を以て説くつもりであるから誤謬はないと思ふのである。

そうして、今日栄養學といへば、カロリーやビタミン説に提はれ、それによつて凡て律してゐるが、私は斷言するのである。ビタミンが全然無い物を食つてさへも、人間は立派に生きてゆかれる事である。

そうして醫學に於ての研究なるものは、食物の方にのみ偏して、人体内に於ける消化機能や栄養製産機能の作用を無視してゐるので其點に根本的誤謬がある。元來、人体内の凡ゆる機能なるものは實に偉大なる化學的製産者であつて、凡有る食物を自由自在に變化させるのである。然るに、醫學に於ては、此變化力といふ意味が未だ知られてゐないのである。然らば、此變化力とは如何なるものであるか。例へば、米飯や菜葉や芋や豆を食つても、それが消化機能といふ魔法使によつて變化し血液となり、筋肉となり、骨となるといふ事である。然るに米飯や菜葉を如何に分析しても、血素の微粒、肉素の一耗だも發見し得られないであらう。只だそれを食する事によつて、体内で自然に各素が製出されるのであつて、全く神秘偉大なる變化力である。故にビタミンの全然ない食物を攝取しても、

それを幾つかの機能の端倪すべからざる活動によつて、ビタミンのAもBもCもアミノ酸もグリコーゲンも、其他未發見のあらゆる栄養素が製出されるのである。從而、右の理によつて考える時、斯ういふ疑問が起るであらう。即ち血液素の全然無い物を食ふ事によつて血液が出來ビタミンの絶無である物を食つてビタミンが製出されるとしたなら、栄養と稱して血液を飲んだりビタミンを攝取したりしたら、それはどういふことになるであらうかといふ事であるが、それは斯ういふ結果になるのである。即ち、血液やビタミンが入るとすると、それ等を製出すべき機能は、活動する必要がないから休止するのである。從而、それ等体内の一部の機能と雖も休止する以上、相互關係にある他の機能も、休止又は退化するのは當然である。

卑近な例ではあるが、彼の牛が草や藁を食ふ事によつて、彼の素晴らしい牛乳といふ美味な栄養汁が出来るが、之は牛の体内の消化機能の活動による變化力のためで、之を今日人間が如何に機械力を以てしても、草や藁から牛乳を製出する事は不可能であらう。



右の理によつて、ビタミン等の栄養素を攝取すれば或期間結果は好いとしても、其後に到つて漸次機能が弱り、全身的弱体化するのは當然である。恰かも車に乗れば一時は樂であつても漸次足が弱るといふのと同様である。故に栄養食を攝れば一時は身体は肥え、血色は良くなり、統計的にも好成績は表はれるが或期間を過ぎれば漸次弱体化するのである。故に、今日栄養食實驗の結果、一二年の統計に表はれたる好成績に幻惑されて、栄養食獎勵の策を樹てるのであるが、實に困つたものである。

故に、右の意味に於て人間の生活力を旺盛ならしむるには、栄養機能の活動を促進させなければならぬのである。それには栄養の少い物を食つて、体内の栄養製産機能を働かせるやうにする事である。勿論運動の目的も其爲である。故に實際上昔から農民は非常な粗食であるが、粗食をするから彼丈の労働力が湧出するのである。もし農民が美食をすれば労働力は減少するのである。又、滿洲の苦力の生活力が強靱なのは有名な話であるが、彼等は非常な粗食であつて、而も三食共同一な物を食つてゐるといふのに察しても私の説は

肯定し得らるるであらう。然るに今日の栄養學に於ては、種類を多く攝る事を推奨するが之等も實際に當籤らない事は言ふまでもないのである。

又、今回の大東亞戰爭に於て、米英蘭の軍隊を敗退後調査した處によると、彼等の食物は日本兵と比較にならない程、贅澤であつたそうである。此事實によつてみても、美食である敵兵よりも粗食である日本兵が強いといふ事は全く私の説を裏書してゐるのである。

今一つの例を擧げてみよう。ここに機械製造工場があるとす。その工場は原料たる、鐵や石炭を運び込み、それを職工の勞作と、石炭を燃やし機械を運轉し種々の順序を経て初めて一個の完全なる機械が造り出されるのである。それが工場の使命であり、工場の存在理由であり工場の生活力である、之が儼し完成した機械を工場に運び込んだとすると、工場は職工の勞作も器械の運轉も必要がない。煙突から烟も出ないといふ譯で其工場の生活は無いのである。從而職工も解雇し、機械も漸次錆ついて其工場の存在理由は消滅するであらう。人間も之と同様であつて、栄養食を攝るとすると、本來栄養食とはより完成し

た食物である。而もビタミンの如き栄養素は特に完成されたものであるから、体内の工場は勞作の必要がないが故に機能の弱るのは當然である。故に、此意味に於て人間は、成可原始的粗食を攝つて体内機能がそれを完全栄養素に變化すべく活動させるやうに爲すべきである。その活動の過程其ものこそ、人間の生活力となつて現はれるからである。

又、近來、食物を出来るだけ咀嚼すべしと謂ふが、之も大いに誤つてゐる。何となれば餘りによく咀嚼すれば胃の活動の餘地が無くなるから胃は弱るのである。從而半嚙み位即ち普通程度が可いのである。昔から「早飯の人は健康だ」といはれるが、之等も一理あるのである。

又、今日の栄養學は、穀類の栄養を輕んじてゐる。栄養といへば副食物に多く在るやうに思つて種々の献立に苦心してゐるのであるが、之も謬つてゐる。實は、穀類の栄養が主であつて、副食物は従である。寧ろ、副食物は、飯を甘く食ふ爲の必要物である——と解しても可いのである。此例として、私は先年日本アルプスへ登山した際、案内人夫の辨當を

みて驚いたのである。それは白い飯のみであつて、全然菜は無いのである。梅干一個も無いのである。私は「飯ばかりで甘まいか」と訊くと「非常にうまい」と言ふのである。それで彼等は十二三貫の荷物を背負つて、頗る險路を毎日登り降りするのであるから驚くべきである。是等の事實をみて、栄養學者は何と説明するであらう。

右の如く、菜がなく飯ばかりで非常にうまいといふ事は一寸不思議に思ふであらうが、それは斯ういふ譯である。元來人間の機能なるものは、環境に順應するやうに出來てゐるから、粗食を持続すれば、舌の方が變化してそれが美味となるのである。此舌の變化といふ事は、あまり知られてゐないやうである。故に、反對に美食に慣れると、それが段々美味しくなくなるので、それ以上の美食を次々求めるといふ、贅澤な人の例をよく見るのである。

故に、私の此説を肯定するとすれば、現在最も重要問題とされてゐる戦時食料政策に對しても、如何に絶大な利益あるかは、量り知れないであらう。

次に、食物に就て説いてみよう。食物とは何ぞや、いふ迄もなく人間を初め凡ゆる生物を造られた造物主が、その生命を保たしむる目的を以て、それぞれその生物に適合する食物を與へられてゐるのは自明の理である。故に人間には、人間が食すべきものとして、大体定められてゐるのである。そうして如何なる食物が人間に與へられたる物でありやを知るべきであるが、之は洵に容易な事である。何となれば、その條件として「味はひ」なる要素があるから、それによつてよく分るのである。即ち、造物主は人間に對しては、味覺なる本能を與へ、食物には「味はひ」なるものを含ましてある。

此理に由つて、すべての食物にはそれぞれの味はひがあり、それを楽しみつつ食する事によつて栄養となり、生が營なまれるのである。故に、ビタミンがどうの、蛋白質がどうのなどといふ事は、何等の意義をなさないのである。

前述の如く、ビタミンの如き栄養素が假に人体に必要であるとすれば、如何なる食物からでも体内の機能が製産し、變化させるのであるから、食物に關する限り、自然で可い

ので、特に栄養學などと、學問的に研究する必要がないのみか、却つて有害でさへあるのである。此理に由つて、各人それぞれの環境、職業、體質等によつて、嗜好物にも自然差異が生ずるのであるが、その時欲する物は、その人に必要であるから攝れば可いのである。喉の涸いた時、水がほしいのと同様である。

茲で、食物の性質に就て述べてみよう。元來栄養なるものは、野菜に最も多く含まれてゐるのである。従而、栄養だけの目的からいへば、穀類と野菜だけで充分健康を保持し得らるのである。故に實際上、全然野菜を食せず、魚鳥獸等の肉のみを以て生活すれば、敗血症を起す事は周知の事實である。これに反して、野菜のみを食つて病氣をおこすといふ事は、未だ聞かないのにも明かである。そうして面白いことは、人間の性格なるものは、食物の種類によつて、大いに影響を受けるものである。即ち、野菜のみを食する時は性格が柔順になり、無抵抗思想となるから、國民的には、國際的敗者となるのである。彼の印度が滅びたのは、宗教的原因にもよるがそれよりも同國民の食物が、殆んど野菜と

牛乳にある事が、その主因であらう。又動物に於ても、ライオンや虎の如き肉食獣は獐犷性なるに反し、牛馬の如き草食動物は柔順なるにみても瞭かである。

從而、菜食者は自然、物質的慾望や野心等の積極性が乏しくなるから、現代文化の社會に於ては、その境遇や職能により魚鳥等の肉をも食しなくてはならないのである。

又、現在の如き國際競争や民族闘争の旺んな時代に於ては、獸肉も必要となるのである。即ち肉食は競争心や闘争意識を湧出せしむるからである。彼の白色人が、常に闘争を好み歐羅巴に戦亂が絶えなまいといふ事實も、右の理由によるのである。

近來、一部の論者に、肉食が非常に害があるやうに言ふが、之は謬つてゐる。元來食物に毒素があるとしても、それは極輕微であつて、自然淨化によつて消失するから、肉食も程度を越えない限り差聞へないのである。

以上の意味に於て、食物の種類は、各人の境遇や職能によつて、取捨選擇すべきである事が判るであらう。

然し乍ら、人間は如何なる境遇にあるも、八拾歳以上になれば、物質的慾望や闘争意識の必要はなくなるから、菜食にすることが、最も良いのである。そうする事によつて健康にも適しより長命を得る事になるのである。

右によつてみても、粗食が如何に健康増進に適するかといふ事は明かである。然るに、今日罹病するや、榮養と稱し動物性食餌を推奨させる以上、かへつて衰弱を増し、病氣治療に悪影響を與へるといふ結果になるのである。

次に、牛乳に就てであるが、牛乳は齒の未だ生えない嬰兒には適してゐるが、齒が生えてからは不可である。それは齒が生えるといふ事は、最早固形物を食してもいいといふ事である。消化機能が發達して固形物が適するやうになつたといふ事である、之が自然である。故に榮養と稱して成人した者が牛乳を飲用するといふ事は、その誤りである事は言ふ迄もない。どういふ害があるかといふと、全身的に衰弱するのである。曩に述べた如く、食物を餘り咀嚼してさへ衰弱するのであるから、牛乳の如き流動物に於ては、より以上衰

弱を來すのは當然である。成人者が牛乳飲用の可否に就て、私に問ふ毎にいつも私は、嬰兒と同様の食物を攝るとすれば、その動作も嬰兒と同様に這つたり抱かれたりすべきではないかと嗤ふのである。之等も學理に偏し實際を無視した醫學の弊害である。

次に、罹病するとよく粥に梅干を攝らせるが、之等も大いに間違つてゐる。元來梅干なるものは、往昔戰國時代に兵糧の目的を以て作られたものである。それは出来るだけ容積が少なく、少量を食して腹が減らないといふ譯である。故に今日に於ては、登山とかハイキング等には適してゐるが、病人には不可である。病床にあつて運動不足である以上、消化し易い物を食すべきである。故に、健康時に於ても、梅干を食ふ時は、食慾は減退するのである。

次に、榮養と稱し、小兒によく肝油を服ませるが、之も間違つてゐるのである。それは食物中には、米でも麥でも豆でも榮でも、それぞれ特有の油分はあるのであるから、体内の機能が凡ての食物から抽出する。それで、過不足なく丁度好いのである。即ち、糠から

は糠油がとれ、菜種からは種油、大豆から大豆油が採れるにみても明かである。然るに、油のみを飲用する事は偏榮養的で、不自然極まる事である。即ち油だけを飲めば、体内機能中の油分抽出機能が退化するから、結果は勿論、悪いにきまつてゐる。

如何なる人と雖も、長命を冀はざるものはあるまい。然らば、長命者たらんとするには如何なる方法が最も効果があるかといふ事である。昔から長命の秘訣として食物、飲酒、入浴、性慾等に關係があるとして長壽者の体験談等があるが、何れも相當の効果はあるに違ひないが、今私が提唱するこの長壽法は理論からも實際からも効果百パーセントと思ふのである。隨而、私と雖も九拾歳を超えたらこの健康法を實行すべく期してゐるのである。

前項營養食に於て説いた如く、人体機能には必要な營養素を製出すべき働きがあるのであるから、その機能の活動を旺盛にする事が最も緊要である。彼の幼少年時代は、その機能の活動が最も旺盛であるから、盛んに發育するのである。此理によつて、長壽を得んとするには、先づ營養機能を小兒の如く、旺盛にする事であるが、そのやうな事が、實際上出來得るやといふに、私は或程度それが可能を信ずるのである。

それは、如何なる方法であるかといふと極端な粗食をすることである。こんなことをいふと、現代人は驚くであらうが、私の説くところを充分玩味されたいのである。それは極端な粗食を攝るとすれば、營養機能は、猛烈な活動をしなければ、必要なだけの營養が攝れないことになる。自然、それは、小兒の機能のごとき活動力が再發生することになる言はば、機能の若返りがおこり始めるのである。機能が若返る以上、全体的に若返へらざるを得ない譯である、これに就て、二三の例を擧げてみよう。

昔から仙人といふ言葉がある。仙人等といふと現代人は一笑に附するであらうが、實際は、立派に、存在してゐたのである。そうして、日本にも相當居たらしいので、文献にも遺つてゐる。彼の有名な平田篤胤の書いた寅吉物語や秋葉天狗の事蹟を書いた著書なども素晴らしい記録であらう。又、近代では、瑞景仙人とその弟子である後藤道明氏（此人は現存してゐると思ふ）一等によつても明かである。然し、何といつても仙人の本場は朝鮮であらう。私は或本で、朝鮮に於ける仙人の修業法を讀んだ事がある。それによれば、仙人

の食物は松葉を細末にしたものと、蕎麥粉を水で練り合はして、饅頭の如き大きさにしたものを、最初は一日に三つ食ふのである。そうしてそれを何年か續けてゐるうちに、今度は二つにし、終には一日一個にするのである。大抵の人は、そこ迄は出来るそうであるがその次が大變である。それは何であるかといふと全然、右の饅頭は勿論、食物は一切攝らざ、只だ水だけで生きるのであるが、之は非常に困難で、ここで大抵の人は落第してしもふそうである。然し、稀にはそれが實行出来る人があるので、そういう人が、本當の仙人になるといふ事である。昔から仙人は霞を食つて生きてるといふが、これ等を指して言つたのであらう。そうして仙人の修業が積むに従つて、非常に身体が軽くなり、山谷を獸の如く馳驅し得らるるやうになるそうである。

之は、私の体験であるが、私は若い頃、肺患に罹り、之を治す爲に三月あまり絶對菜食をしたことがある。勿論、鯁節も用ひなかつた。然るに菜食によつて非常に身体が軽くなり、よく高い所から飛降りたりした事がある。そうして、高所から下を瞰下しても、不思

議に恐怖を感じなかつた事を今でも覚えてゐる。其後、普通食になるに従つて、漸次普通状態になつたのである。又肉食を旺にした事もあつたが、其頃は身体が重く、又病氣に罹り易かつたので、肉を制限してから結果が良くなつたのである。

右の如き体験によつて私は想像するのであるが、日本人の戦争に強いのは、勿論精神力もあるが、白人よりも菜食が多いので、自然身体が軽く敏捷であるといふ事も、見逃す事の出来ない一原因であらう。特に日本の飛行家が白人の追隨を許さない優秀さは、右の原因が大いにあると思ふのである。

飛行家に就て、爰で今一つ重要な事柄がある。それは急降下爆撃であるが、之は白人は日本人ほど思ひ切つた技能を發揮出来ないそうである。何とをれば彼等は、猛烈な急降下をすると、毛穴から血を吹くそうである。それは全く肉食の爲である事はいふ迄もない。即ち肉食者は敗血症になるからで、敗血症とは、人も知る如く、血管が破れ易く、又出血すると、容易に止まらないのである。ただ今次の戦争に於て、獨逸の飛行家だけは急降下

爆撃を行ふが、之はヒットラー氏が兵隊の糧食を菜食を主にした爲で、獨逸が戰爭勃發の數年前から、盛んに滿洲から大豆を大量輸入したといふが、それであつたといふ事である。又往年彼の旅順の戰に於て、ステッセル將軍が降服したのは、勿論乃木將軍の攻戰が偉効を奏したに因る事は勿論であるが、當時露軍が長い間の籠城の結果、野菜が缺乏し、敗血病に罹る者が日に増加したといふ事も降服を早めたとの事である。又日本に於ては昔から武士が腹を切りかけたり、鎗に突かれたりし乍ら、其刃物を擱んだまま、暫くの間物を言ふが、そういふ事は、白人には絶對出來ないのである。何とをれば白人は負傷すると、出血が容易に止まらないが、日本人は出血が止り易いばかりか、刃物に對し、肉が收縮して密着するやうになるやうである。之等は全く菜食と肉食との相違からである。

そうして一体仙人はどの位長命するものか正確には判らないが、仙人の壽命に就て或本にあつたのであるが、今迄一番長命のレコードは八百歳で、それは一人であつたが、五六百歳は何人もあつたやうである。從而、二三百歳は、仙人では早死の方であると書いてあ

つた。又或本に神武天皇以前、數万年前からの記録に、やはり二三百歳から五六百歳までの高貴の御方の御事蹟が、相當の正確さで書いてあつた。

之は、私の想像であるが、日本人の壽命に就て、食物が一番關係があると思ふのであるが、最古代は勿論、菜食ばかりであつたのは事實である。そうして生物を食ひ初めたのは貝類からであつた事は、我國の各地から發見される貝塚が證明してゐる。其時代の先住民族は、魚を漁る術を知らなかつたので、先づ採り易い貝類から食ひ始めたのであらう。それが後に漁る事を知つて、魚食をするやうになつたのであるが、それでも其頃は、百歳以上の壽命は易々たるものであつた。然るに、曩に述べた如く、漢方藥の渡來によつて、非常に壽命は短縮し、明治以後に到つて、肉食や西洋藥等によつて、彌々短命になつたばかりか、体位も低下したのである。

それから、古代の日本人が非常に巨大で、勇猛であつた事も事實である。勿論其時代の國土には、猛獸や大蛇が至る所に棲息し、猛威を揮つてみたであらうが、火藥のない時代



に、それ等を征服した事によつても想像されるのである。史上にある日本武尊が偉大な体格で被在られた事や、大蛇を跨がれた爲に、その毒に當り給ひ薨去遊ばされたといふ事にみても、その御勇猛であらせられた事は窺ひ知らるるのである。もし現代人であつたとしたら、大蛇を跨ぐ所か一見して周章てて逃げるであらふ事は勿論である。又須佐王尊が日の河上に於て八俣の大蛇を退治られ、その血によつて河の水が赤く染まつたといふ傳説なども、古代人の如何に勇猛であつたかは想像され得るであらう。

#### 軍陣醫學に就て

近時、新聞紙の報導によれば、軍陣醫學の進歩によつて、南洋の熱帶地に於ける傳染病が著減したといふので非常に誇稱してゐる。之等を讀む一般人は、全く醫學の進歩として感激するであらうが、それは眞の意味を知らないが故に無理はないのであるが、その眞相を知るに於て、決して醫學の進歩ではなく、其結果は恐るべきものがあるのである。

再三説いた如く、熱帶地に於ける傳染病は最も旺盛なる淨化作用であるから、出征の際強制的に行ふ種々の注射に因る藥毒の爲に、淨化力が弱るので、それが爲に淨化作用が起り得ないから病氣に罹らないのである。

然るに、猛烈な淨化作用を停止する程の強烈なる藥毒であるから、それが一旦集溜凝結し、淨化作用が起るに於て、熱帶病よりも一層悪性であるのは當然な歸結である。それが丁度、内地へ歸還した頃から發病するであらうと思ふのである。故に、今回の支那事變以來、内地へ歸還後の勇士等がマラリヤや腦疾患其他の病氣發生する者の多きをみても明かであらう。彼の日清、日露の役の頃はそういふ事は無かつたのである。之を例へていふならば、借金の證書を用意して先方へ行き、散財をして現金を拂ふ代りに證書を渡して一時を糊塗して歸るが、それが時日を経て請求が來る。其時は利子がフえて金高が増すから、返済に骨が折れるというやうな譯であらう。

次に、日露戰爭當時、外國の出征兵には精神病者發生が尠くないが、日本の出征兵に限つてそういふ者は一人もないといつて誇つたものであつた。然るに、今次の大戰爭に於ては相當精神病者が發生したそうであるが、之等は全く注射が原因であると思ふのである。

近來、南洋馬鹿といふ言葉が多くの人の口から唱へられてゐる。それは如何なる譯かといふと、南洋に暫くゐると頭腦が非常に悪くなるといふ事であつて、その原因は不明とされてゐる。之に就て私の解釋を書いてみよう。

右の原因は、全く注射の爲である事はいふ迄もない。誰も知る如く、南洋へ行く將兵は固より、すべての人に對し、熱帯病豫防の爲として強制注射を行ふ。然るに、その藥毒は南洋の強烈なる太陽に照らされる部分は頭腦であるから、そこに集注するのは勿論である。そうして普通一二ヶ年後に淨化作用が發生し初めるので、丁度内地へ歸還頃發生する順序になる譯である。此症狀としては、頭腦が朧濛として散漫になり易く、神經集注が困難になるから、緻密な仕事は出来なくなるのである。それが爲、出征以前の業務に就く事能はざる勇士が非常に多いのである。

私は大膽に言ふのである。今後、南洋に赴く人にして、内地へ歸還後、以前と同様の健

康を保ち得る者は殆んどないといつても可いであらう。大部分の者は罹病して死亡するか生ある者は腦疾患になるかであつて、僥倖にも普通の生を營み得る者は極めて少數であると思ふのである。

右の如き悚るべき事實は、決して誇張ではない事を、本醫術の理論を知るに於て、何人と雖も肯かるるであらう。今後、大東亞共榮圈を建設し、八紘爲宇の大業を完成せんとする我等皇國民の中堅分子たる青壯年層が、以上の如き誤れる西洋醫學の犠牲にならざるを得ないといふ事は、洵に恐るべき事ではあるまいか。

昭和拾七年六月三十日付の手紙が、大阪市で開業してゐる私の弟子（婦人）から來たのであつた。その手紙を原文のまま左に書いてみる。

「前略、一つ面白いニュースを申し上げます。近日京都より軍醫が治療の見學に來るといふ話が出来ております。それは丁度一ヶ月前、二十七才の兵隊さんが京都より参りました。戦傷兵です。戦車が折り重なり十四五人即死、其時背髓を打たれて九死に一生を得て赤十字病院へ入院し、今後一ヶ年間、絶對安靜を言渡された者です。首の付根より背骨へかけ丁度掌一杯だけ位熱がありました。それと左手指三本に力が入らず手拭もしぼれないのです。それだけですのに背髓炎になつたかどうかを試験するのに、背髓の最下端より漿液をとり試験をされたのです。其時の痛みと苦しみは大變なもので、頭の中で戦車がガラガラガラツと轉回するやうなササマジい音がして痛いの痛いの餘りの苦しさによして下さいと言つたら、軍醫に言下に死ぬぞと叱りつけられ、實に苦しい思ひをしました。だのに試験

の結果は何ともないとの事。次に今度は所もあらうに頭蓋骨に錐で穴を開けて再び漿液をとり試験するといふたのが、私方に來る三日前です。生きた心地もなく私方に参りました。當人の父親は戦地にあり大佐です。治療一回にして半分熱はなくなり、三日目に完全に熱は解消しました。頭の痛みも消へて左手全部小さくなつてみて爪さへが伸びなくなつてゐたのが伸びてきて、以前の如く右手と同様に力も出るやうになりました。一週間で殆んど苦痛は消へました。一ヶ月目には元の勤務に立直る事が出来ました。再び人間として兵隊の勤務は出來ない爲、兵役免除となりましたので、元の務をしたいと申しております。一ヶ年絶對安靜の重患が、京都から西宮まで通ふて、そして元々通りの体となり、勤務が出来るなんて、只々不思議でならんと申しております。これを軍醫に話しましたのです。軍醫が申しますに、知らんぞ、責任は持たんぞと、併し不思議な事があるものだな、ほんとは良くなつてゐる。何ともないがどうも變テコだ、僅か一ヶ月位で治る病氣じやなかつた筈だが、兎に角一度連れて行つてくれ、話を聞かせてもらひたい。承諾を得てきてくれ

との事でした。私の考へでは、内出血し、それに發熱したものと思ひます。それを大層な事をして苦しめたものです。」

右の如き實例は無数にあるのであるが、之を探りあげたといふ事は、國家の爲生命を賭して第一線に活躍した尊い勇士が、その餘りにも惨しい苦痛を與へられ、而もその苦痛が無益であり、今や頭腦にまで穿孔されようとしたといふ事實に胸を打たれたからである。斯の如き大苦痛を與へてまで查べるといふ事は、軍醫は決して悪意はないのであるが、全く西洋醫術に於ける診斷が幼稚である爲と殘ギヤク性の爲である事が、あまりにも明白である。そうして軍醫は、背髓及び腦にまで穿孔して診査しようとしたのであるが、私の弟子なら一分間の診斷で背髓炎の有無は判るのである。而も、背髓炎でなかつた事は、局所だけの治療で簡単に全治したのにみても明かである。然るに、治療までに一ヶ年を要し、絶對安靜でなくてはならないといふのであるが一ヶ年後、果して治療するや否や頗る疑問であらう。

此事實を檢討してみる時、醫學に於ける診斷の低劣と野蠻的である事は否めないと共に右の如き災禍を蒙りながら、泣寝入に終らざるを得ない不幸なる人々が、如何に多いかを想像する時、私は天を仰いで長大息をするのみである。

今日、大東亞戦争を勝ち抜く爲の統後人の御奉公として最も力を注がねばならない事は何といつても貯蓄であらう。苟うして貯蓄をするには豫算生活を立てなくてはならない事も勿論である。然し乍ら、實際問題として、他の如何なる項目も努力次第で豫算通りか、又はそれ以内に喰ひ止め得る事も敢て不可能ではないが、獨り醫療費のみは如何に努力すると雖も、豫算通りにゆかない事のあるのは誰もが經驗する所であらう。折角永い間、凡ゆる苦心努力をして多少の餘裕が出来喜んでゐると、突如として家庭の誰かが病魔に襲はれるとする。直ちに醫療を受ける。渺々しく治らない。やれ手術だ入院だといふ事になるとすると、その費額は貯蓄しただけでは間に合はない。アベコベに借金をしなければならぬといふやうな事になる。斯ういふやうな例は決して珍らしい事ではないのである。

右の如き實例を考へる時、今日確固たる豫算生活は全く不可能であらう。幸ひ半年か一年、醫療費を豫算以内で喰ひ止め得たとしても二年三年になるに及んで、十中八九までは

前述の如き豫算突破の大運算に遭ひ、失望落膽しない時が来ないと、誰が言ひ得るであらう。それは他なし、今日の日本人の体位が低下し、あまりに罹病し易いと共に、あまりに醫療の効果が無いといふ—その二つの原因である事は、洵に瞭かな事實である。

右の意味に於て、本療治の如何に偉大であるかといふ事である。修得者が一人でも家庭内にあり、全家族が、此日本醫術による健康法と病氣の原理を知るに於て、滅多に罹病しない程の健康体となり、偶々罹病すると雖も仕事を休まないで、容易に速かに治癒するのであるから、一錢の醫療費も要しない譯で、その利益の莫大なる事は量り知れないであらう。而も、常に安心を得つつ生活なし得るといふ事も、金錢に換へ難い幸福であらう。從而、私は斷言するのである。本醫術を知らないで、豫算生活を樹てるといふ事は、一種の投機的行爲でしかないといふ事である。

故に、此意味に於ても、本療法こそは、今日の時局に對し、國家に裨益する所、如何に甚大であるかは、讀者の想像を乞ひたいのである。

私は曩に、日本人の全部が殆んど病人であると言つた。そういう事をいふと、それは間違つてゐる。世間いくらかも健康で活動してゐる人があるではないかと曰ふであらう。成程外見上だけでいへば、如何にも健康そうに見へるからそう思ふのも無理はないが、私は之に對し、詳細説明してみよう。

私の發見した一病氣は淨化作用であるといふ、その淨化作用といふ意味は、言ひ換へれば、一旦固結した處の毒素に對し、自然的に溶解作用が起るといふ事である。從而、溶解作用發生以前は、何等病氣症狀はないから健康体と同様である譯である。即ち、毒素保有者と雖も、それが固結してゐて、聊かの溶解作用の發生がない時は、健康体として自己自身もそう信じてゐるし、且つ顔色も体格も健康そうであるから、假令、醫家が健康診斷を行ふと雖も、今日の醫學の診斷では、淨化發生以前の固結毒素を發見し得られないから完全健康と誤るのは致し方ないのである。故に、醫家の診斷に於て、模範的健康とされた

ものが、間もなく發病して死に到つたというやうな實例がよくあるのは、右の如き理に由るのである。

從而、毒素を保有し乍ら、淨化未發生の人に對して、私は擬健康といふのである。然るに、本醫術の診斷に於ては、右の如き擬健康である毒素保有者に對し、保有毒素の盡くを知り得るのである。醫學に於て、病氣潛伏と稱するのは、此保有毒素を想像して言ふのであらう。そうして醫學の診斷に於て、血壓計とか、ツベルクリン反應、赤血球の沈降速度梅毒の血液検査等に表はれたる症狀を以て、潛伏疾患を豫想するのであるが、それに對し如何なる臟器又は如何なる局所に潛伏病原があるかを適確に知り得ないのであるから疾患の發生を防止し得ないのは當然である。此意味を以てすれば、近來唱ふる豫防醫學などは全く意味をなさないのであつて、結局、空念佛に過ぎないと私は思ふのである。

昔から、人は病の器と謂ひ、いつ何時病み患ひがあるかも知れないと案じ、又、釋尊は人間の四苦は生病老死であるとし、病は避け難いものとされてゐるが、それ等は何れも擬

健康であるから、何時淨化作用が発生するか判らないといふ状態に置かれてゐるからである。故に、眞の健康者が増加するに従ひ、右の如き言葉は消滅してしまふであらう。

右の如くであるから、眞の健康とは、全然無毒の人間でなければならぬのである。そういうふうな完全な健康体は、今日の日本人には、恐らく一萬人に一人位であらう。何となれば、九拾歳以上の長命者は、右の如き健康者であるからである。然るに本醫術によれば無毒者となり得るのであるから、完全健康体となり、九拾歳以上の長壽者となる事は、易々たるものである。

#### 結核と神經作用

現代醫學は、肺結核を製造してゐるといふ事は既に説いた通りである。之に就て私は、別の觀點から批判してみよう。

元來、人間は他の動物と異なる點は、精神生活がある事である。即ち喜怒哀樂の感情に富み外部からの衝動による感受性の頗る鋭敏であると共に、精神が肉体に與へる所の影響

も亦甚だしいものがある。如何なる人と雖も心配や不安のある時の食慾の減少や、顔色憔悴、沈黙、憂鬱、不眠、頭痛等、種々の現象が起る事は誰もが知る所である。故に是等精神的苦惱が永續するに於て、神經衰弱ともなり、甚だしきは精神病者となる事さへもあるのである。

右の理によつて、今日結核の問題を考慮する時、精神作用の影響こそ、看過出来ないものがあるから私は詳説してみよう。それは、結核ならざるものが、精神作用によつて眞の結核となるといふ事である。一例を挙げれば是に、或家庭に結核患者が一人發生したとする。然るに、家族の誰も、いつか自分に感染するかも知れないといふ不安が起り、斷えずそれが頭腦にこびりついて離れない。すると會々風邪をひく、普通ならば單なる風邪として簡単に治るべきものが、此場合は、もしかすると、愈よ自分に結核が感染したのではないかと想ふのは當然であらう。從而、此場合は特に速かに醫師の診斷を受ける。醫師も亦いつか家族の者に感染しはしないかと思つてゐるので、特に用心深く慎重に扱ふので、

患者はさてはと思ひ不安が生ずるから、拂々しく治らないのは當然である。それが爲元氣は消失し、食慾も不振となるから、憔悴、羸瘦、不眠等の症状が次々表はれてくる。それ等は肺患の症状であるといふ事を、平素から見たり聞いたりしてゐるので益々悪化する。遂に醫師も首を傾げるやうになる。それによつて患者の不安は彌々募り、漸次、結核患者となるのである。

又、自分は肺結核になつたといふ觀念は直ちに不治である事を聯想し、死といふ最後の場面が臉に浮び畢に本格的肺患となるのである。嗚呼！最初單なる風邪であつたものが、觀念の力によつて、畢に死へまでも推進んでゆくのである。

之を以てみても、實に、精神作用の及ぼす影響の如何に大きいかといふ事が判るのである。實際右のやうな経路による肺患者は案外多いであらうと私は想ふのである。故に絶対に感染しない結核を感染するとなし、必治であるべき肺患を不治となすといふ事は、皮肉かは知れないが一種の神經戰術ともいへよう。

又、獸類の中、特に牛は結核に罹るやうである。然るに、健康牛も結核牛も壽齡は異ならないやうであるから、全く結核の影響は受けない事になるのである。之によつてみても人間に於ける精神作用の、如何に怖るべきかといふ事が知らるるのである。



凡そ如何なる人間と雖も幸福を希はぬ者は一人もあるまい。全く幸福こそ、人間の慾求としての最大のものであり、最後の目標であらう。そうして幸福の最大条件としては、何といつても病氣の無い人間、病人の無い家庭之以外にないであらう事は餘りに明白である。然し乍ら、今日迄の世界に於て、全く無病たり得る事は不可能であるばかりでなく、現在健康であつても、何時如何なる場合に、何等かの病氣が発生するかも知れないといふ不安は何人と雖も抱いてゐるのである。而も、偶々病氣に罹るとして、それが容易に治癒すべきものであるか、或は、容易に治癒し難いものであるかといふ事も全然豫測がつかないのであるから、實に不安此上もないのである。斯様な理由によつて、順調な境遇にある人も成功者になつた人としても、病氣に對する不安がある爲、眞の幸福感に浸り得られないといふのが事實である。

そうして、凡ゆる不幸の根源は病氣である事は曩に再三説いた通りである。貯蓄の目的の大方は、罹病した時の用意であり、健康保険も生命保健もそれが爲である。孤兒院も養老院も共済會も方面事業等、凡ゆる社會事業も、それが爲であらう。

從而、國家が如何なる理想的政治を行ふも人間の病患を解決なし得ない限り、國民の眞の幸福はあり得ないのである。洵に健康こそ幸福の根本であり、否幸福の全部であるといつても可いであらう。然るに今日迄、根本的に病患の解決をなし得る醫術も方法も、全然無かつた事である。

私は、大言壯語するのではない。私の創成した日本醫術と健康法によれば、人間をして病患の不安から解放なし得るのである事は、既に述べた通りである。故に私は、私の醫術を知る人にして初めて幸福人となり得るといふ事を斷言するのである。何千年來、人類が要望して熄まなかつた所の「幸福への道」は、既に拓かれたのである。

私が創始した此醫術こそは、眞の日本醫術であり、日本的療法と思ふのである。それに就て私は、別の方面から觀察してみたいのである。別の方面とは何であるかといふと、それは日本神道即ち惟神の大道によつてである。そうして、惟神の大道とは、私の考察によれば、日本之道否日本人の道、否々未來に於ける世界人類の道であると思ふのである。

然らば、惟神とは如何なる意味であるか。之に就て、昔から今日迄種々に説かれてゐるが、私は惟神之道とは、大自然の道といふのが最も適切ではないかと思ふのである。

元來、天地間の森羅萬象凡ゆる物の生成化育、離合集散、榮枯盛衰は自然の理によるのでそれによつて無限の進展を遂げつつあるのが此世界であつて、その實相を觀する時、不自然なるが如くにして自然であり、偶然に似て必然であり、空漠たる如くにして嚴然たる法則あり、全く人間の叡智や學理によつても到底窺知し得べからざるものがある。

そうして、大自然の動きは眞理そのものである事は勿論である。そうして眞理の具現者

であり、宇宙の支配者である者、それを尊稱して神といふのである。故に、宇宙意志といふも神の意志といふも同一である。此理によつて大自然そのものが神の意志であり、大自然の實相が神意の具現であるといへよう。

此意味に於て、人間なるものは大自然の中に呼吸し、大自然の力によつて生育するのである。故に、生死と雖も大自然即ち神意のままであるべきである。故に、大自然に逆へば滅び、大自然に従へば榮えるのは言ふまでもない。此理によつて人間の師範とすべき規は全く大自然であつて、大自然のままに行く、即ち大自然に習ふ事こそ、神意に習ふ事であり、神意のままに進む事であり、それがカムナガラである。實に惟神とは玄妙至極な言葉といふべきである。

右の理を人間の健康に當嵌めて解釋する時それは明かである。即ち人間は何が故に生れたかといふ事である。勿論、神が此土を經綸する上の必要から生れさせられたのであつて各人それぞれの特徴を具へてゐるのは、そういふ意味からである。故に、生命の命は、命

命の命の字である。故に、生命のある間、神の命を奉じて生き活動すべきで、その命を疎かにしてはならないのである。死ぬー即ち生命が亡くなるといふ事は、命令を解かれる事である。従而、人間は神の受命者であるから身を淨め心を清めて使命遂行に精進しなければならぬのである。昔から人は神の子とか神の器とか、神の宮とかいふが、右の意味に外ならないと思ふのである。

然るに、神の最高の受命者ともいふべき人間が、健康を害わるといふ事は、大自然即ち神意に背いてゐるからである。従而、如何なる點が反自然であるかを發見すること、それが根本問題である。然しながら、人間の悲しさ、それを發見する事が不可能であるが爲、止むを得ず、器械や藥劑を以て、病氣を治癒しようとしたのであるから、一時的効果より以上に出でなかつたのである。

そうして、前述の如き惟神、即ち自然の儘といふ事は決して難しい事ではない。洵に簡にして單である。即ち健康に就ていへば先づ人間は生れた以上、幼時は母の乳を呑み、生

育するに従つて普通食を攝るので、それは大自然は人間の食物として五穀、野菜、魚鳥なるものを、人間の嗜好に適するやう千差萬別の形狀、美觀、柔軟、五味、香氣等を含ませ造られてある。故に人間は、其土地に於て生じたるもの、四季それぞれの季節に唸つたる物を樂しんで食せばいいのである。そうして各自に與へられたる職域を遂行し、教育勸語を範として實踐躬行、これ勗むるに於て、不健康など有り得べき筈はないのである。又、大自然は、天地間凡ゆる物に、淨化作用なるものを行ふのである。此事は、大祓の祝詞中にある如く、祓戸四柱の神の擔任せられ給ふ處であつて、例へていへば、地上に汚穢が溜れば風に吹き拂ひ、雨水によつて洗ひ淨め、天日によつて乾燥させるのである。故に一軒の家に於ても、塵埃が溜ればそれを拂ひ掃き水で洗ひ拭き清めるので、それ等の事は人間に於ての病氣、即ち淨化作用と同様である。従而、此場合、自然に放置すれば治癒するのは當然である。又淨化作用の期間中、發熱や痛苦等によつて勞務に耐えなければ休養すべきであり、食慾がなければ食はなければいいのである。それが自然である。そうして人間

の淨化作用は人間自身の体が行つて呉れるから、寔に都合がいいのである。

故に、此意味に於て私の提唱する醫術と健康法は飽迄自然を本とし、自然に準ふといふので、惟神醫術といふ所以なのである。

### 神の經綸

抑々宇宙とは何ぞや、それは無限大の空間の中に、太陽、月球、地球及び星辰が存在してゐる事は誰も知る處である。そうして吾々の住む此地球こそ宇宙の中心であり、主である。又日、月、星、辰は地球の爲に存在し、地球は日月星によつて存在するのである。そうして地球は、主神が或意圖の下に經綸し給ふ中府である事を知らねばならない。故に、その經綸を行はせ給はんが爲に、神の代行者として人間なるものが造られてあるのであり又萬物は人間の爲に造られたのである事は言ふ迄もない。従而、人間の使命たるや、實に重且つ大であつて、神の理想を此地上に顯現すべき爲に生れさせられたのであるから、それを自覺する事によつて、眞の人間たり得るのである。此意味に於て、人間は自己本位の

我慾に因はれたり、國家社會の進運に聊かなりとも背馳するやうな事なく、惟神、神定め給へる大君を現人神と崇め奉り、忠孝を本とし安逸を卑しみ、各々の職域に奮勵努力すべきであつて、是に到つて始めて人間たる本分に適ふのである。特に日本人は世界に冠たる皇國の民であり、神の選民である事を自覺しなければならぬのである。

そうして、主神の深甚なる御目的や、其御經綸は、到底人間の想像だも及び得べからざる事は固よりであるが、只だ御經綸の上に於て、神は其時代々々に必要なる人間を顯はしそれぞれの使命を遂行させ給ふ事は吾々と雖も想察し得らるるのである。勿論、英雄も偉人も聖者もそれであり、又、戦争も平和もその爲であり、斯くして此地上は一步々々無限の進展を遂げつつある實相は、誰もが眼にも映るのである。故に、何時果つべくもなくみゆる大戦争や大渦亂大天災も、その渦中にある間は暗澹たるものであるが、時過ぎ時來れば、又平和の光は射し初め、泰平を謳歌するといふやうになるのであつて、實に變轉極まりないのが世界の姿である。そうして古來からの歴史の推移を、心を潛めて冷靜に觀る時

そこには一貫した而も嚴然たる一神の攝理と御目的が、臆氣ながらも、窺ひ知らるるのである。

以上の意味によつて、私は數年前、日本が世界を統一すると共に、東西文化を融合して成つた新しい文化が日本から生れて、逆に世界へ擴充する事を豫言した事があるが、今やそれが着々實現の時となつて、最早何人と雖も、明かに知り得る状態になつたのである。

今戦ひつつある大東亞の戦争も、支那事變も三國同盟も、五、五、三の華府會議も、聯盟脫退も、第一次歐洲大戰も、日清戦争も日露戦争も明治維新も、その準備であつた事が肯かるであらう。

又、畏くも、遠きは神武天皇の八紘爲宇の大神勅も、今日の爲に發せられ給ふた一大豫言と拜察せらるるのである。

そうして、支那事變によつて數年を費した事が、大東亞戦争に對する周到なる準備工作の爲であり、南洋一帯の資源を米、英、蘭が二三世紀に亘つて開發した事もそれであり、

大東亞戦争に全力を擧げて、後顧の憂なく戦ひ得るといふ事は、中立條約の爲と、盟邦獨逸が蘇聯をあれほどに打撃を與へたからでもあらうし、五、五、三の比率によつて、日本の海軍が猛訓練を行はざるを得なくなつて、それが今日、赫々たる戦果を擧げ得る動機となつた事等も、實に深甚なる神意でなくて何であらう。全く彼を思ひ是を憶ふ時、日本をして世界の盟主たらしむべく、數千年前より、神が深遠なる御經綸を行はせ給ひつつあつた事を拜察さるるのである。實に一切は神の御意志によつて動き、歴史とは神の經綸の道程にしか過ぎない事と思ふのである。

昭和十七年九月廿七日印刷  
昭和十七年九月廿八日發行

(非賣品)

「明日の醫術」

著者 岡田茂吉

發行者 東京市蒲田區安方町一七一番地  
原清作  
印刷者 電話蒲田三八六四番

不許  
複製

發行所

東京市蒲田區安方町九四番地  
合名會社 坂井商事出版部  
電話蒲田三八六四番

420  
396

71 3P-57

終